
仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

皆大好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strike
r s

【Nコード】

N3059Y

【作者名】

皆大好

【あらすじ】

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した。仮面ライダーと出会った者達はある者は二つの顔を持つ状態に、ある者はその者達を支える立場でありながらも未来へと一步を踏み出していた。

新暦0071年。

同窓会的任務の中で彼女達は出会うことになる。

『仮面ライダー』に。

これは心と顔を隠す決意をした一人の戦士の物語。

第一話 「青い仮面ライダー」 (前書き)

皆様。

初めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

皆大好きです。

それでは第三部の開幕です！

第一話 「青い仮面ライダー」

新暦0071年。

これはミッドチルダの暦である。

『新』と名がつくという事は一応『旧』もあるということだろうが、今はさしたる問題ではないので取り上げない。

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から六年が経過した世界。それでも時間は等しく時を刻んでいる。

*

『時の列車』

それを手にした者はある事を決断しなければならない。

『普通』の生活を捨てるという事を。

*

空は快晴であり、心地よい風が吹く季節。

時刻は『午後』に差し迫っていた。

市立聖祥大付属中学校あと一時限受けければ学生達にとっては憩いとなる『昼休み』になるのだが、集合時間が迫っているので早退しなければならぬ。

『三年二組』の教室をフェイト・T・ハラウンが出ようとしていた。

「じゃフェイト。いつてらっしゃい。授業のノート取っとくからね」「うん。ありがとうアリサ。あといつものでいいんだよね？」

フェイトは学生生活のケアをしてくれているアリサ・バニングスに

感謝しながら代償はいつものものでいいのか確認を取る。

「そうそう。報酬は翠屋のケーキセットでいいわよ」

「わかった」

フェイトは笑みを浮かべて鞆を持って教室を出ていく。

このやり取りだが、最初はアリサが冗談半分で言ったものだがフェイトはそれを本気で受け止めて、『自分達の学生生活があるのはアリサやずすかのお陰』という感謝の意を込めて返した事から始まっている。

学生生活が守られる代償がケーキセットというのは、正直破格な取引といってもいいだろう。

「なのはも！気をつけてね！」

「はぁーい！」

アリサがフェイトと同じ目的を早退しようとする高町なのにも声をかける。

無論彼女もフェイト同様に学生生活のケアの代価として翠屋のケーキをご馳走するようになっていく。

自分のお小遣いで買っているので、やましい事は何一つない。

フェイトを追うようにして、なのはも教室を出た。

『三年六組』でも同じ様なやり取りが行われていた。

「ほんなら、ずすかちゃん。また月曜にな。お礼は例の物でええんよね？」

「うん。いつもありがとう。はやてちゃんも気をつけてね」

「何言ってるの。私等がこうして学生できるんもみーんなずすかちゃん、アリサちゃんのお陰なんやで。もうありがたくてありがたくて」

八神はやてが仏様を拝むようにしてずすかに手を合わせて拝む。

「は、はやてちゃん！？もうそれはやめてって……」

ちなみにこんなやり取りも日常的に行われているため、クラスメイト達は温かい目で見ていたりする。

はやてが早退し、残りの授業の面倒を月村すずかに頼んでから教室に出ると廊下にはフェイトが歩いていていた。

「はやて」

「フェイトちゃん。なのはちゃんは？」

「後から来るから大丈夫だよ」

「そか」

フェイトとはやてが他愛のないやり取りをしていると、

「フェイトちゃん。はやてちゃん」

遅れてなのはが走ってきた。

はやてとフェイトは互いに顔を合わせて笑っていた。

三人は人目のつかない学校の屋上に移動していた。

既に授業が開始しているのか、屋上には三人しかいない。

「三人とも準備は出来てる？忘れ物はない？」

三人が持っているデバイスを介して、エイミー・リミエッタが確認するように言う。

「はい！大丈夫です！」

「私も大丈夫だよ」

「問題ありません」

なのは、フェイト、はやてはそれぞれ返事をする。

「それじゃ、いつもの場所に転送ポートを開くね」

エイミーの言葉に三人は頷き、それぞれ待機状態になっているデバ相イスを掌にとつて翳す。

「レイジングハート！」

「イエス。マイマスター」

なのは主の声に紅い珠――レイジングハート・エクセリオンが返す。

「バルディッシュュ！」

「イエッサー」

野上良太郎から貰った懐中時計と同じくらいもしかしたら比べてはいけないくらいに大切な物――バルディッシュュ・アサルトに声を

かけ、相棒は即座に返す。

「リインフォース！」

かつて自らの信念と意思を貫いて消えたリインフォースが残した金色の首飾りを掌に取る。

「はい！マイスターはやて！」

リインフォースと酷似した容姿をしながらも、青い瞳に愛嬌のある雰囲気のリインフォースと違い子供な体型をしている掌サイズの少女が出現した。

少女――リインフォース^{ツヴァイ}（以後：リイン）である。

「セーッとアップ！！」

三人が同時に翳した。

その直後に校舎の屋上には三人の姿はなくなった。

なのは、フェイトはバリアジャケットを纏い、はやては騎士服を纏っていた。

リインははやての左肩に乗っかっている。

足場を空に移して互いに顔を見合わせてから、

「ゴオオオオ！！」

と第162観測指定世界の空を駆けた。

*

第162観測指定世界の衛星軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「じゃ改めて今日の任務の説明ね。その世界にある遺跡発掘先を二つ回って発見されたロストロギアを確保。最寄の基地で詳しい場所を聞いてモノを受け取って、アースラに戻って本局までの護送！」

エイミーが第162観測指定世界の空を飛んでいる四人（リイン含む）に告げた。

『平和な任務ですねえ』

飛行の心地よさと任務が血腥くない事になのはは安堵し、どこか平和な声色を出していた。

「まあモノがロストログアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人が揃ってもう一箇所にはシグナムとザフィーラがいるわけだから、まあ多少の天変地異くらいならなんとかしちゃうよね」

エイミーは信頼を込めて言う。

「よろしく頼む。あと今更君達に説明をする必要はないが一応言っておく。イマジンに出くわしたら迷わずに撤退する事。人命第一だからね」

エイミーの後ろにいるアースラ艦長であるクロノ・ハラウンが現場にいる面々に一言言う。

了解と声が聞こえた。

今日、時空管理局はイマジンに対しては常に後手に回り肝を嘗めさせられている。

イマジン一体と戦うのに何十人の武装局員を用いて戦わなければならないという事実だ。

しかもそれで勝てればいいのだが、現実問題としては十回イマジンと戦って勝てるのは一、二回である。

結果は『快勝』でも『楽勝』でもない『辛勝』なのだ。

個人対個人ならばその結果でもいいだろう。

だが、一部隊対個人の戦いでその結果はあまりに情けないというのが組織の上に立つ者達の意見でもあり、世間の評価でもある。

「彼等の存在が今になって肌身に染みるなんて……」

「本当だね。良太郎君と初めて会った時に言われたんだよね？イマ

ジンは決してそんなに甘い相手ではないって」

「ああ。あの時は単純な過大評価だと思っていたが、こうして仮面ライダー彼等がいけない時にイマジンと対峙してみてそれが決して誇張とかではないと理解したよ」

「仮面ライダーっていえばクロノ君。聞いたことない？ 『青い戦士』とか 『青い仮面ライダー』の話」

「何度かは聞いたことあるよ。正体不明で神出鬼没。ここ最近になつてからか。この話が飛び交うようになったのは……」

クロノは腕を組んで正体を考えるが、思い当たる節がない。

エイミイにしても同じだった。

いつまでも雲を掴むような噂話をするよりも任務を遂行している面々の事に話題を切り替えることにした。

「みんな最近忙しいし立場も固まってきちゃったから、こーやって同じ任務に関われるのもあと何回あるのかなあ」

エイミイとしては皆が個々に羽ばたいていく事は悪いとは思っていない。

だが寂しさがあるのもまた否定できないのだ。

「そうだな」

クロノとて表情には出さないが、複雑といえは複雑だったりする。

いつも当たり前と思っていた事が変わっていく。

経験がないわけではないが、正直慣れないし順応する努力をしなければならぬのは常だ。

「あの子達の研修期間が懐かしいやー。あの頃は本当艦内も賑やかでさあ」

「僕は騒々しくてかなわなかったがな」

エイミイとクロノが研修期間の頃を思い出しながら素直な意見を述べていた。

「ま、今日は楽しい同窓会的任務。終わったら賑やかにやりましょ」

「まあ仕方ないな」

二人は一通りの談話を終えると、仕事に集中する事にした。

たとえ内容が楽でも気を抜いていいという理由にはならないからだ。

*

北部定置観測基地に向かう中で四人はある話題が飛び交っていた。現在手ぶらだし、ただ目的地に向って飛んでいくだけでは味気ないので誰からともなく話をする事になったのだ。

「『青い仮面ライダー』の正体か……。良太郎達じゃないことは確かだよ」

フェイトが噂の人物がチームデンライナーではないと断言した。

「侑斗さんやデネブちゃんでもあらへんね」

はやてもチームゼロライナーではないと即断する。

「どうしてなんですかあ？マイスターはやて」

はやての左肩に乗っているリインはフェイトと自分の主があっさりと言い切ることがわからない。

彼女は実をいうと『仮面ライダー電王』や『仮面ライダーゼロノス』の事は聞かされているが、実物を見たことがないので今ひとつピンとこなかったりしていた。

「リインも実物を見たら私とフェイトちゃんがあっさりと違つと言いつ切れるんもわかるんやけどね」

写真一つ残っていない現在では彼等がこちらに赴いてくれない限り不可能な事だ。

「そつだよねえ。口で細かく言うより実際の電王さんやゼロノスさんを見てもらったほうが早いもんね」

なのはも笑みを浮かべながら、はやての意見に賛同する。

「リイン。電王さんはね、赤、青、金、紫とか色々形態を持っているんだよ。そしてゼロノスさんは緑色と錆びた感じの赤色の二つの色を持ってるとんだ」

なのはがリインに電王とゼロノスの装飾しているカラーリングについて説明した。

「でもでもそれだとゼロノスさんには当てはまらなくても電王さんには当てはまっちゃうですよ?」

「リイン。噂の仮面ライダーの色はきつと青色がメインカラーだと思っよ。それに電王にとって青色はあるけどメインじゃないんだよ」
「フェイトが補足するようにリインに告げる。」

「ふええ〜。そうなんですかあ」

「リインは感心していた。」

「それで話を戻すけどな。なのはちゃん的には青い仮面ライダーについてどない思う?」

「私?」

「うん。私も聞きたいな」

「はやてが話題を戻してなのはにふっかけ、フェイトも意見を求めていた。」

「正体不明に神出鬼没。個人でイマジンと戦う戦闘力。私達が出動する前に解決してしまう手際によさからして変身者は変身していないなくても相当強いと思うよ」

「なのはは戦技教導官として言う。」

「短時間でイマジンを倒せるって事はそれだけイマジンの生態を知っているという事になるし、相当場慣れしていなきゃできない事だよ」

「そして戦技教導隊で明らかになっている事実を話し始めた。」

「なのはは戦技教導隊入りした際に、上司に訊ねた事がある。」

「魔導師何人がかりでイマジンを倒せますか?」と。

「すると上司はこのように答えた。」

「イマジン一体倒すのに魔導師ランクがC-からA+の魔導師が五十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AA-からAA+なら四十人がかりで三十分以内に仕留めなければ負けは確定。AAA-からAAA+までなら十人がかりで二十分以内に仕留めなければ負けは確定。S-からSSS+までの場合、単体で挑むなら五分以内に仕留めなければ負けは確定」と言われた。

この上司の言葉は定義づけられている魔導師ランクの実力。魔法を使用するのが人間である事を踏まえての事である。

元々、身体機能が人間よりもはるかに優れているイマジンと戦うのだ。多少のズルはやむなしとしてもこれほどの差があるとは思わなかったくらいだ。

「改めて聞かされると……」

「良太郎達が凄いつて思わせられるね」

なのはの説明にはやてとフェイトは素直な感想を述べた。

「あ、目的地ですう」

リインが指差す方向に北部定置観測基地があった。

目的地に到着すると、三人はバリアジャケットを解除して管理局御用達の制服になる。

「さて基地の方はと……」

なのはが周囲を見回すと、男女一組の管理局員が敬礼していた。知的なイメージがある眼鏡をかけた男性と穏やかな雰囲気を持った眼鏡女性だ。

「遠路お疲れ様です。本局管理補佐官グリフィス・ロウランです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「ありがとうございます」

なのはは眼鏡男性――グリフィスと眼鏡女性――シャリオに感謝の言葉と敬礼で返す。

「ご休憩の準備をしておりますのでこちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

グリフィスが三人を休憩室へ案内しようとするが、なのははやんわりと断った。

「私等、これくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやる？」

はやてはグリフィスと面識があるのか慣れたんだ感じた。

「はい……。存じ上げてはいるのですが……」

グリフィスは重々わかっているが、それでも形式的なことなので引くに引けない。

はやてとグリフィスのやり取りになのはとフェイトは頭上に疑問符を浮かべる。

「ああ、二人は会った事なかったんやっただね。こちらの彼はグリフィス君。レテイ提督の息子さんやで」

はやてが簡潔にグリフィスの紹介をした。

紹介を聞いた二人は「ああ、なるほどお」とか「確かに似てる」というコメントを返した。

「フィニーノ通信士とは初めてだよな？」

フェイトもなのはもはやても初対面だ。

「はい！でも皆さんの事はすごーく知っています！！」

シャリオの表情はアイドルや芸能人を見て酔っている一般市民の表情に似ていた。

「本局次元航行部隊のエリート魔導師。フェイト・T・ハラオウン執務官！」

シャリオが憧憬の眼差しをフェイトに向ける。

「いくつかの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札。八神はやて特別捜査官！」

次に同じ眼差しをはやてに向けた。

「武装隊のトップ、航空戦技教導隊所属。不屈のエース。高町なのは二等空尉！」

最後になのはに向けてきた。

「陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄ですう〜！！」

シャリオが三人を前に頭が落ちてしまうのではないかというほどの勢いで頭を下げていた。

三人はそのように誇張されるのはいつまで経っても慣れていないので苦笑いを浮かべるしかない。

「リンフォースさんの事も聞いていますよー。とっっても優秀なデ

「バイスだつて」

「ありがとうございます」

「シャリオはラインと握手するために右手の人差し指を出す。ラインは人差し指を両手で握った。

「握手が一応成立したのだ。」

「シャリー。失礼だろう」

「あ、いけない。つい……」

「グリフィスはテンション高めな状態になっているシャリオを窘める。

「シャリーって呼んでるんだ？仲良し？」

「フェイトがグリフィスにシャリオとの関係を訊ねる。

「す、すみません。子供の頃から家が近所で……」

「グリフィスがどのように答えたらいいのかわからない。

「幼馴染だ！」

「なのはが二人の関係を言い当てる。

「いいね。私達も幼馴染だよ」

「フェイトも自分達の間柄を打ち明ける。

「幼馴染の友達は貴重なんだから。大切にしてくね」

「はいつ！」

「なのはが幼馴染と言う間柄を持つ先輩として後輩二人に指導した。

*

「時空管理局本局に『無限書庫』がある。」

「デジタルが主流ではあるが、ここだけはアナログであったりする。」

「日々書物が増え続けるので整理が難しくなるのが特色だ。」

「何せ一日に書物化して棚に入るのは一冊ではないのだから。」

「それが日々続くのだから、常人なら発狂しかねないだろう。」

「なお武装局員に無限書庫の業務をさせた場合。このような感想が返ってきた。」

「出口のない迷路にいるみたいだ。気が変になりそうになる」

「これなら現場で犯罪者を追い掛け回した方がいい」

「本当に適正不適正が問われる場所」
などである。

上司が聞き分けのない部下に対して、「無限書庫に放り込むぞ」という脅し文句があったりする。

なおこの脅し文句を聞いた部下は素直に上司に従うというエピソードがあつたりする。

現在も無限書庫には管理局の制服を着た司書達が数名、本棚や本と睨めっこをしていた。

『ユーノ。そつちのデータはどうだ？』

クロノが宙にモニターを展開して訊ねてきた。

その中で私服姿の少年がいた。

無限書庫司書長のユーノ・スクライアである。

「もう解析を進めている。なのは達が戻る頃には出揃うよ」

『そうか』

ユーノの返答にクロノは満足していた。

「はいよ。ユーノ」

アルフに似た容姿をした幼女が数冊の本を持ってユーノに渡してきた。

「ありがとう。アルフ」

アルフに似た容姿をした幼女。コレが現在のアルフの姿である。

「アルフもすっかりその姿が定着しちゃったね」

「ああまーねー」

ユーノの台詞にアルフは感慨深く思う。

「フェイトの魔力を食わない状態を追求していったらこーなっちゃてねえ」

アルフは腕を組んで思い出す。

フェイトの魔力を食わないために試行錯誤した日々をだ。

「あたしはフェイトを守るフェイトの使い魔だけどさ、フェイトはもう十分強いし一人じゃないしね。そばにいて守るだけが守り方じ

やないしさ。家の中のことをやったりするのも結構楽しいし、来年にはクロノとエイミイも結婚する予定だし子供とか生まれたらもつと忙しくなるしね」

『アールフリー！その話はまだ秘密だつて！！』

「えー、まあいいじゃん」

モニターにはエイミイが映し出されて、顔を紅くしていた。

後ろにいるクロノも紅くなっていた。

「ええと。おめでとうございます。クロノもやっと決心したんだね……」

いきなり暴露されたエイミイに同情しながらもユーノは祝福の言葉を送った。

『うづ……ありがとう。それよりユーノ君はなのはちゃんと何ともないわけ！？』

エイミイが仕返しとばかりになのはとユーノの関係を訊ねてきた。

「なのはは僕の恩人で大切な幼馴染ですよ。それだけですよ。本当に」

ユーノは即答した。

『この二人はまだ先に進みそうにないか……』

エイミイは苦笑しながらもモニターを閉じた。

「よし！モニター閉じたね。もう解いていいよ」

アルフの声と共にユーノの姿が光りだす。

やがてユーノから男性司書へと姿が変わった。

「ふうー。疲れましたあ。司書長の姿に化けてハラオウン提督と会話するのってこんなに緊張するんですね」

「まあ相手がクロノ達だからね。一見さんなら簡単には見破れやしないさ」

アルフが変身魔法を用いていた司書に労いの言葉を送る。

「アルフさん。司書長、大丈夫でしょうか？」

女性司書がユーノの心配をする。

「アイツが考案したプランA Zを無事に成し遂げるのがあたし達が

ユーノにできる事だしね。後はアイツが無事に帰ってくるのを祈るしかないからねえ」
アルフが天井を見上げて言った。

*

第162観測指定世界に私服姿のユーノと左肩に乗っている白い毛並みに青いメッシュの入ったフェレット……ロッキーがいた。眼前にはこおろぎ型のイマジンであるクリケットイマジンがいた。目的が何なのかはわからないが、イマジンが単体で動く時は『契約者の望み』か『はぐれイマジン』の場合は自分の意思と相場が決まっている。

「そこをどけえ。俺は今からロストロギアを探すんだからよお」
その言葉からして契約者持ちのイマジンだとユーノは推測できた。

「ロストロギアの盗掘が違法だってわかってやってるんだね？君の契約者は……」

となると契約者は裏のブラックマーケットでロストロギアを売ろうとする『死の商人』といった所だろう。

契約を履行させてしまえば『時の運行』だけでなく、罪のない人間が泣きを見るのは確実だろう。

「残念だけど契約者さんの望みは叶わないんです！」

ロッキーがユーノの方から降りて左前脚を出して宣言する。

「あん？何でだよ」

「僕達が君を倒すからだ！」

訝しげな表情を浮かべているクリケットイマジンに対して、ユーノとロッキーは真剣な表情になっていた。

「ユノさん！僕、本当の姿に戻ってもいいんですよね？」

「もちろん。思いつきり暴れていいよ。プロキオン！」

「はい！」

ロッキーが確認するように訊ねると、ユーノは二つ返事で肯定する。

それからユーノは自らの身体エネルギーを用いてベルトを出現させて腰に巻きつけた。
カチリと音がする。

そのベルトはデンオウベルトではなく、ゼロノスベルトに酷似しておりクロスディスク部分は青色と白色になっていた。

ユーノはパーカーのポケットから黒いケースを取り出して、中身を取り出す。

それは黒い素体に青色のカラーが施されているカードだった。ちなみに裏面は白色のカラーが施されている。

バイオリンで奏でているようなミュージックフォーンが流れ出す。

「変身!!!」

ゼロノスベルトのバックル上部にあるチェンジレバーを右にスライドさせてからカードを挿入した。

『ベテルギウスフォーム』

電子音声で発すると、ユーノの身体に仮面ライダーゼロノスと酷似したオーラスキンに纏われていく。

青色が目立つオーラアーマーが装着され、両肩、両下腕、両ふくらはぎに二センチほどの刃のような突起が出現する。

そして、頭部にはトリケラトプスの系統であるネドケラトプスを髣髴した電仮面が銀色のデンレールを走り、形状を象って装着される。

「はあ!!!」

叫ぶと同時に右手で薙ぎ払うような仕種をする。

ブオンという音が鳴って、クリケットイマジンを仰け反らせた。

ロッキーが全身を輝きだし、見る見るうちに大きくなっていく。

身長は横にいる戦士より若干高いくらいになっていた。

フェレットと仮面ライダーのイメージが混濁して誕生したフェレット型のイマジンであるプロキオンである。

ちなみにロッキーとは愛称であって本名ではない。

「お、お前！仮面ライダーゼロノスか！？」

クリケットイマジンは興奮気味に叫ぶ。

別世界側のイマジンでもこのくらいの知識は有している。

「違いますよ。我が主は仮面ライダーゼロノスではありません」

プロキオンが即座に否定する。

戦士はゆっくりと歩きながらクリケットイマジンに告げる。

「もう一つのゼロノス。 アナザー ANOTHERゼロノスだ」

この時、この場に仮面ライダーANOTHERゼロノス（以後：A
ゼロノス）が降臨した。

第一話 「青い仮面ライダー」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです！」

Aゼロノス降臨！

その戦闘力はいかに？

同窓会的任務にも怪しい兆しが見え始める。

第二話 「舞台表と舞台裏」

第二話 「舞台表と舞台裏」 (前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

それでは第二話どうぞ。

第二話 「舞台表と舞台裏」

『ゼロノスカード』

それは周囲の者達が使用者に関する『記憶』を忘却する能力を持つカード。

知らずに使った者には『後悔』が。

知って使う者には強い『覚悟』が必要とされる。

*

『皆さんの速度ならポイントまでは十五分ほどです。ロストログアの受け取りと艦船の移動までナビゲートします』

シャリオ・フィニーノが定置観測基地から現在、目的地まで飛行している高町なのは、フェイト・T・ハラウン、八神はやてに告げた。

「はい。よろしくね。シャリー」

「グリフィス君もね」

フェイトとなのはが快諾した。

『はい!』

二人のナビゲーターが元気よく返事した。

「しかし、私達も今年で六年目か」

はやて達は九歳から時空管理局で働いているので六年と既に『ベテラン』と呼ばれてもおかしくない。

「中学も今年で卒業だしね」

フェイト達は今年聖祥大付属中学を卒業する事になっている。

「卒業後は今より忙しくなるかなあ」

なのはの言うように、この三人は中学校を卒業してからは高校に進学するつもりはない。

時空管理局の仕事の本業にしていくのだ。

はやては元々両親がいなかったため、その手の選択肢に異議を唱える者はいない。

財政面でバックアップをしてきている元時空管理局提督であり、現在は地球で隠棲生活を送っているギル・グレアムは『与えられた時間を仕事だけでなくしっかりと楽しむ事を約束できるならば構わない』という条件をつけた。

フェイトの場合は家族全員が管理局員であるため、進路がそのようになる事に関してはハラオウン家全員反対を唱えたりはしなかった。ただし、グレアム同様に『仕事に忙殺されずに人生を楽しむという事が条件』がリンデイ・ハラオウンからつけられていた。

この手のことで一番悩まされるのがなのはである。

彼女は、フェイトやはやてと違ってそこまで『魔法』の世界にどっぷり浸かる必要性がないといえない。

特に罪人扱いを受けて恩赦を貰った事もないので変に引け目になることもない。

高校に進学して掛持ちしながら業務に取り組んだからといって後ろ指を差されることはないだろう。

先の二人と違って、なのはに関しては揉めに揉めまくったのはいうまでもない。

リンデイが仲裁を取り計らう中でやっと丸く収まったくらいだ。

しかし、なのはにも先の二人と同じく『条件』がつけられていた。

『気負わない事。時折は帰ってくる事。そして人生を楽しむ事』である。

保護者達がこのような条件をつけたのには理由がある。

それは『時の運行』を守っている仮面ライダー電王と仮面ライダーゼロノスを知ったことが大きな原因となっている。

彼等の存在によって、当たり前のように存在している『時間』が実

は脅かされたり護られたりしているものだと思ったからだ。

誰にも称賛されずに、日の目の当たらない所で戦っている者達の事を考えると護られている側にしてみれば『時間』を大切に扱う義務が生じると感じるのは不自然なものではないだろう。

まさに生き急ぎとは真逆の事である。

生き急ぎとは限られた時間を有効には使わずにいたずらに放置している行為といってもいい。

ここにいる三人だけでなく、保護者達も教わったのだろう。

ここにはいない別の世界にいる『仮面ライダー』に。

「あの時は揉めたなあ」

なのはは、頬を掻きながらその時の事を思い出していた。

「でも義母さん達があんな条件をつけてくるとは思わなかったよ。

私達そんなに生き急いでるようにみえたのかな？」

フェイトも思い出しながら呟く。

「多分、そんな風に見えたんやらなあ。アカンなあ折角侑斗さん等が命懸けで護ってくれた時間やのにそんな風に使おうとしてたなんて」

はやてもしみじみ考えてから苦笑いを浮かべながら反省する。

「そうだね。今度良太郎達に逢う時に、そんな生き急いでたら怒られちゃうもんね」

「良太郎さん。怒ったら怖いもんね……」

フェイトもなのはも野上良太郎の起こった姿を思い出して、少しブルツと震えた。

「そんなに怖いんですか？」

リインは野上良太郎を知らないため、怒った姿を知るはずもないので管理局のエースと呼ばれている二人が心底怯えたような態度を取ったので、はやてに訊ねた。

「そうやね。本気で怒った野上さんには多分やけど誰も勝てへんよ」

「へ？」

リインが間抜けな声を出してしまう。

主の言っている事が信じられないのだ。

「シグナムやヴィータちゃんでもですか？」

「良太郎はシグナムに勝った事があるんだよ」

「ほ、本当ですかあ!？」

フェイトの言葉に信じられない、という表情をリインはしていた。

「うん。それは間違いないよ。私もはやてちゃんもその現場を見ているしね。それにヴィータちゃんは良太郎さんを怒らせたりはしないって心から誓っていると言ってたしね」

なのはが補足する。

「それにシグナムとフェイトちゃんは野上さんを巡ってのライバルなんやで」

リインには実を言うところの手の事は知らされていない。

リインに訊ねられる事もなかったからだ。

「ふええ。そうなんですか」

「は、はやて!」

「いずれはバレるんやからええやないの」

フェイトは顔を真っ赤にして抗議するが、はやては涼しい顔をしている。

「バレるってバラしたのは、はやてちゃんだよ……」

なのはがツツコミを入れる。

「自分のことを棚にあげて言わないでほしいよ。リイン。はやてはね、桜井さんから貰ったカードを毎日一時間懸けて磨いてるんだよ」

「ちよつ……フェイトちゃん!それは内緒やつて言うたのに……」

「いずれはわかっちゃうんだからいいじゃない」

自身の痴態(?)を暴露されて、はやては顔を紅くして睨むがフェイトは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「はやてちゃ……マイスターはやては、ユウトさんって人が好きなんですか?」

左肩に乗っかっているデバイスが無邪気に主に訊ねる。

「な、ななななに言うてんの!?!リイン!わ、私と侑斗さんはそ

んな関係やあらへんよ！それに私の片思いやし……」

真っ赤な顔が更に真っ赤になって否定しようとするはやてだが、語尾がどんどん小さい声になっていた。

「二人ともそろそろ……ね？」

この二人がこういうやり取りをすると必然的になのはが仲裁役になつてしまう。

なのはは二人が純粹に一人の人間を想える事が羨ましいと思った。自分にも正直、そう想える人がいるのかどうかと訊ねられると「気になる人がいる」と答えてしまう。

『好き』か『嫌い』かの二択だと『好き』だと答えられる。

だがこの『好き』は、フェイトやはやてが一途に想い続けている原動力となつているそれとは明らかに違っている。

それにその人物は明らかに何かが変わったようにも思えた。

根拠はないし、そのような事を当人に訊ねたとしてもはぐらかされるのがオチだろう。

相手は自分よりもはるかに口達者なのだから。

「みんなは卒業後はどうなるの？私は教導隊の一員としてあちこち回る事になるんだけど……」

なのはは話題を切り替えると同時に自分の今後の凡その予定を告げた。

「私は長期の執務官任務を受ける事になるね」
フェイトも答える。

「私は卒業の少し前にミッドの地上にお引越しや。ミッドクラナガン首都の南側で家族六人で暮らせる家。えーカンジのトコを探し中やねんけどな。決まったら遊びに来てな。二人とも」

「うん！」

「行く行く！」

フェイトとなのはが二つ返事で答える。

「リインも、はやてちゃ……マイスターはやてと一緒にお待ちしてるです！」

ラインも笑顔で言う。

「あはは」

「そんな堅い言い方しなくても『はやてちゃん』でいいんじゃない？」

「う……」

何度も言い換えるラインがおかしいのかフェイトは笑い、なのはは呼びたいようにに呼べばいいのではと

打診するが、ラインとしてはそれを甘んじる気はないようだ。

四人はそのような談笑をしながら、空を駆けていた。

*

北部定置観測基地では、護送隊のナビゲートをするためにグリフィス・ロウランとシャリオ・フィニーノがモニターに映る映像の変化を注意しながら見ていた。

「あれ？発掘地点と通信が繋がらない？」

シャリオが異変を口に出した。

「本当に？」

グリフィスが確認するように訊ねる。

シャリオはもう一度キーボードを叩きながら試みるが、結果は同じだった。

「本当だ……」

「一体どうなってるんだろ……」

グリフィスはシャリオが凝視している画面を見るが、『通信不能』と表示されていた。

またも警報が鳴った。

「今度は何？これってまさか……」

グリフィスが担当している場から鳴り響いており、席にモニターを戻ってみてみるとそこには見たことがない三人が映し出されていた。グリフィスは中央モニターに映し出す。

「もしかしてこれって……」
シャリオも映し出された映像を見て、驚愕の表情を浮かべていた。そこに映し出されていたのは二体のイマジンに一人の青色が目立つ戦士だった。

「もしかして最近噂になってる……」

「仮面ライダー……」

シャリオの続きをグリフィスが締めた。

*

目的地が視認できる範囲になると、四人はその光景を見て異変を感じた。

それは『楽しい談話』の時間の終了にもなる。

四人の表情が『少女』から『魔導師』になっていた。

現場上空に辿り着くと、発掘をしていた大学生二人が十体近くの楕円型の機械に襲われていた。

「現場確認。機械兵器らしき未確認体が多数出てます！」

「ん！」

ラインが解説すると、はやてが頷いた。

「フェイトちゃん！救助には私が回る！」

「私は遊撃する！はやてとラインは上から指揮をお願い！」

「了解！」

なのは、フェイトが自身の役割を告げ、はやてとラインは了承してその場で散開した。

「おし！やるよライン！」

はやては左掌に乗っかっているラインに呼びかける。

「はいです！」

ラインは了承して両手を広げてそのまま、はやての胸元に飛び込んだ。

激突はせずに溶け込むようにして入っていった。

『ユニゾン・イン!』

はやての髪が色素の薄い色になり、瞳の色が青色となる。

右手には『騎士杖』であるシュベルトクロイツが握られていた。

「中継!こちら現場!発掘地点を襲う不審機械を発見!強制停止を開始します!」

なのはが北部定置観測基地へと連絡する。

『本部に連絡します!』

「お願い!」

シヤリオが返答し、フェイトは念押しに頼んだ。

「あ……」

「ああ……」

大学生二人は機械兵器の攻撃にもはや『最期』が来ると直感した時だ。

機械兵器が中央にある発射光が輝きだして、発射しようとした時だ。なのはが素早く着地して、右手を前に出す。

バリア系の魔法障壁を展開させる。

機械兵器が発射されたレーザーを見事に防ぎきる。

バシンと言うような音が鳴り響くが、その魔法障壁には破損はあるか亀裂一つ入っていない。

なのはが大学生二人を無事に守っているのを確認してからフェイトはバルディッシュ・アサルトを天にかざす。

「プラスマランサー!」

『イエッサー』

フェイトの左右にバチバチと稲妻が帯びた黄金の魔力球が数個出現した。

やがてそれは黄金の環状魔法陣と鍔やぐらとなる。

「ファイアっ!」

フェイトの掛け声と同時に黄金の鍔は一直線に機械兵器に向っ

く。

機械兵器は『避ける』という事を知らないのか全弾直撃する。

「大丈夫ですか？」

「は……はい」

「あれが何故襲ってきたかはわかりません？」

なのはは助けた大学生二人に襲われた事情を訊ねる。

「わかりません。コレを運び出していたら急に現れて……」

大学生の一人が両手で抱えているバンドで止められている木箱をなのはに見せた。

『広域スキャン終了。人間はあの二名だけです！』

はやての内にいるリインが告げた。

「ん！」

はやてはその報告に頷く。

「あれは機械兵器……？」

『該当データはありません』

フェイトは腑に落ちない表情をしており、バルディッシュ・アサルトが短く眼前の敵が過去にも存在していたかどうかを照合した結果を告げた。

(当てたけど、倒した感触がまるでない……)

黄金の鏃は確かに機械兵器に直撃した。

だが、破壊したという実感がまるでないのだ。

何故そのように感じるかの答えは機械兵器自身がネタをばらしてくれるのを待つしかない。

『中継です！やはり未確認！危険認定破壊停止許可が出ました！』
シャリオが本部の指示を告げてくれた。

「了解！発掘員の救護は私が引き受ける！なのはちゃん！フェイトちゃん！思いつきりやってええよ！」

「了解！」

はやてがGOサインを送り、二人が承る。

機械兵器が何かを展開した。

足元に魔法陣が展開していないので、魔法ではないと思われるが似ているものだろうと推測しながら三人は凝視する。

『マスター』

「フィールドエフェクト？」

レイジングハート・エクセリオンが主の判断を仰ぐ。なのは

基本魔法防御四種の一つであり、『フィールド』とは範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御である。なのはが先程用いていた『バリア』系とは違い、展開範囲が広く効果によれば手も足も出せなくなってしまう厄介なものにもなる。

「様子見てワンショット！レイジングハート！」

『アクセルシューター』

なのはは機械兵器に向けてレイジングハート・エクセリオンを構える。

今から放つ一発を決め手とは考えず、機械兵器がどのような効果を持つフィールドを展開したのかを探るための一発だ。

ガシャンとレイジングハート・エクセリオンのヘッド付近のカバーがスライドしてガシャンと音を立て、蒸気を噴出しながら空になった薬莢を排出する。

「シュートオオオオ！！」

大きな桜色の魔力球から光線が走り先端には小型の魔力球が数個、機械兵器に向って飛んでいく。

機械兵器に直撃すると思われたが、展開したフィールド内に桜色の魔力球が侵入すると『球』としての形を保てなくなりやがて微粒子となつて消滅した。

「無効化フィールド！」

なのはは展開したフィールドの正体を見極めた。

「AMF……。AAAランクの魔法防御を機械兵器が……」

フェイトはその現実を受け入れながらも、このようなものを制作した者がまともな輩ではないと本能的に感じた。

（はわわっAMFって言ったら魔法が通用しないってことですよ！

？魔力結合が消されちゃったら攻撃が通らないです！)

はやての内にいるリインが狼狽していた。

AMFはいわば魔導師を無力にする事さえ可能なフィールドであり、戦闘キャリアの薄いリインの言う事はしごく尤もな事である。

「あはは。リインはまだちっちゃいなあ」

はやてはうるたえるリインとは対照的に落ち着き払っていた。

(ええっ!?)

はやてが言う『ちっちゃい』とは身体的にという意味ではなく、精神的にという意味であり『幼い』とか『経験が足りない』という意味が含まれていたりする。

「憶えておこうね。戦いの場で「これさえやつとけば絶対無敵」なんて事はそうそう滅多にないんだよ」

なのはは真剣な表情でリインに伝える。

レイジングハート・エクセリオンはガシユンガシユンとカバーをスライドしながら音を立てて蒸気を発しながら空薬莖を二個排出する。フェイトのバルディッシュ・アサルトもカバーがスライドして内部に組み込まれたシリンダーが回転してガシユンと叩きつけるようにしてカバーが元の位置に戻った。

その動作を計二回行う。

「どんな強い相手にもどんな強力な攻撃や防御の手段にも、必ず穴はあつて崩し方もある」

はやてが解説を始める。

その間にフェイトを中心に、黒い雷雲が出現する。

ゴロゴロゴロと雷の音が鳴り始める。

なのはは最寄の地面にレイジングハート・エクセリオンを向けて威力が小さい魔力砲を放つ。

地面が抉れ、いくつかの小さな岩となり桜色の環状魔法陣を帯びて浮上していた。

「魔力が消されて通らないなら、『発生した効果』の方をぶつければええ」

はやての言葉どおりに二人は『発生した効果』を目的とした魔法を繰り出そうとする。

「たとえば小石……」

はやてが例える。

「スターダストオオ」

なのはの方は発射態勢が整っていた。

「たとえば雷……」

更にははやてが例える。

「サンダアアア」

フェイトも同じ様に態勢を整えて、後は発射するだけだった。

「「フォールウウウウ!!!」」

なのはが環状魔法陣を帯びた小岩を、フェイトが魔力で発生させた雷雲から生じる雷を一齐に機械兵器に向けて振り下ろした。魔力を帯びた小岩は隕石のように。

雷雲から降り注ぐようにしている雷は天の裁きのように。

機械兵器に触れ、その原型を歪めて機能を停止させた。

小岩に潰されて機能を停止したもののや落雷して内部メカがショートして停止したするなど様々な残骸となって転がっていった。

(ふえええ。すごいです)

「二人とも一流のエースやからね」

内のラインが感心しているが、はやてにしてみれば慣れた後景であった。

なのはとフェイトの攻撃範囲外にいた機械兵器が向きを変えて離れようとしていた。

「追おうか？」

「ううん。ええよ。こっちで捕獲するから平気やで」

なのはが申し出てきてくれるが、はやては丁重に断った。

二人にばかり働かせて高みの見物というのが嫌なのだ。

(リイン。頼んでええか?)

(はいです!)

はやては内のリインに逃亡する機械兵器の捕獲を任せることにした。

(発生効果で足止め捕獲というと……)

機械兵器対策を講じながらリインは使用する魔法を考える。

足元に三点の小魔法陣からなる三角形のベルカ式の魔法陣が展開される。

(こつです!!)

リインが発動すべき魔法を放つ。

逃亡を謀ろうとしている機械兵器にリインの足元と同じ魔法陣が出現して形を変えて動きを縛るような動きをする。

フリーレンフエッセルン
(凍てつく足枷!!)

機械兵器が氷漬けとなってその動きを停止した。

氷から噴き出る冷気が寒気を誘うが相手が機械なので反応はない。

「お見事!」

(ありがとつございますですう!)

なのはの褒め言葉をリインは素直に受け取った。

難が去り、護送隊の代表としてフェイトが大学生二人と掛け合っていた。

「これがそのロストロギアですね」

「はい……。中身は宝石のような結晶体で『レリック』と呼ばれています」

わかる範囲で詳細を聞いているフェイトをなのはとはやては見ていた。

『……し……こちら……』

聞き覚えのある声なのは達の耳に入った。

「こちらアースラ派遣隊。シグナムさんですか?」

なのはは送信者の名を確認する。

『その声はなのはか？そちらは無事か？』

「機械兵器の襲撃があつたんですが……。まさかそつちも？」

『こちらは襲撃ではなかつたがな。危機回避のため、既に無人だったのが不幸中の幸いだったが発掘現場は何もない。先程ヴィータとシヤマルを緊急で呼び出した。あと悪報と朗報の二つがある』

シグナムが『悪報』と言うからには相当悪いものだろう。

なのは、はやて、リンそして大学生との話が終わったフェイトは真剣な表情になっていた。

『まず悪報からだ、この次元世界にイマジンが一体いる。目的はわからん』

『イマジン』という単語を聞いただけで四人の表情は強張った。

出くわした場合は『交戦』ではなく『撤退』が魔導師達の暗黙のルールとなっている。

圧倒的に力量差がある者達なら迷わずこのルールどおりに行動する。それなりに戦える者達はよほど危機に迫らない限りは戦ったりはしない。

そのくらい『仮面ライダー』^{（トウ）}がない今の別世界ではイマジンが脅威になっているのだ。

『そして朗報だ。そのイマジンと噂になっている青い仮面ライダーが交戦中との事だ』

*

Aゼロノスとプロキオンはクリケットイマジンと睨みあっていた。プロキオンは両腕をクロスさせてフリーエネルギーを用いてシヤキ^{（トウ）}ンと三本の鋭い爪を両手から生やす。

「レッツ、ゴー、バトルです！」

そのままクリケットイマジンに向っていった。

その速度は恐ろしく速い。

クリケットイマジンと間合いを詰めると、右フックを繰り出す。

しかし先に当たるのは拳ではなく三本の爪であるが。

ブオンという音が鳴り、クリケットイマジンはその場にしゃがんでから空振りになるがそのような音が鳴る時点でプロキオンの放った一撃は速い上に重たいのだという事を理解した。

「言葉遣いに騙されたぜ。テメエ、ガキの癖に随分と生意気な戦い方してるじゃねえか!!」

後方に下がってクリケットイマジンはフリーエネルギーで二丁の拳銃を作り出してから、構えて狙いを定めて引き金を絞る。

「!!!」

プロキオンはその場で高く跳躍するとその直後にフリーエネルギーの光線がクリケットイマジンに直撃した。

「ぐふう!!」

プロキオンの奇襲はこの攻撃のための布石ならば抜群のコンビネーションである。

跳躍したプロキオンはクリケットイマジンの後方に着地する。

Aゼロノスの右手には銃が握られていた。銃といっても完全に『銃』の姿をしているわけではない。

ナイフのようにも見える形状だ。

Aゼロノスの専用ツールであるデュアルガツシャー（以後：Dガツシャー）である。

Aゼロノスは空いている左手を腰元に添えているDガツシャーのパーツに手を添えてから外す。

そして、下にあるゼロガツシャーの先端に似たパーツに縦連結させてから拳銃の引き金と密接している側のグリップを握ってから引き抜いた。

フリーエネルギーによって『銃』としての機能を持つDガツシャーバレットモード（Dバレット）へとなった。

左側のDバレットもクリケットイマジンに向ける。

そして引き金を絞る。

ガガガガンとフリーエネルギーの光線がたった一回引き金を絞る

だけで数発発射された。

右手のDバレットも人差し指を引き金に添えて絞る。

左と同じ様にたった一回、絞るだけで数発のフリーエネルギーの光線が発射される。

そのままAゼロノスはクリケットイマジンへと歩み寄る。

「いだっ！あだあ！いだだだあ！！」

クリケットイマジンの体から後ろに足を下げながら火花が飛び散る。Dバレットから発射される光線一発分の威力は仮面ライダー電王ガンフォームのデンガツシャーガンモード（以後：Dガン）の弾丸一発の二分の一しかない。

つまり一発食らってもイマジンには決定的なダメージを負わせる事は出来ないのだ。

しかし、DバレットはDガンにはない利点もある。

それは連射性である。

Dガンは一回引き金を絞って一発しか発射されないが、Dバレットは一回絞っても数発発射されるのだ。

それでパワー不足を補っているわけだ。

クリケットイマジンは前方と後方を交互に見比べる。

「ええい！クソオ！二対一じゃ分が悪いぜ！だがなあ電王やゼロノスじゃねえテメエ等ポツと出に負けてやるわけにはいかねえんだよ！」

そう言いながら、両腕を水平に構えて引き金を絞る。

銃口から弾丸が発射され、立ち止まらずにその場で駒のように回り始める。

弾丸を避けながら、Aゼロノスとプロキオンは顔を見合わせて頷きあう。

「変身！」

プロキオンは全身を輝きだして、イマジンからフェレットへと姿を変えた。

クリケットイマジンはまだ回りながら乱射している。

Aゼロノスは跳躍してクリケットイマジンの頭上で逆立ちの態勢をとってから二丁のDバレットの銃口を向けて引き金を絞る。銃口から発射された光線は無数の雨のようにして降り注ぐ。

「ぐわああああっ!!」

前面にしか注意がなかったため、頭上からは完全に死角となっていた。

「変身！」

プロキオンがフェレットからイマジンへと変えて、その場で軽く跳躍して腰に捻りを加えて左飛び回し蹴りを放つ。

右側頭部に直撃して、左へと飛ばされるクリケットイマジン。

地面に転がるがすぐに起き上がる。

「ユノさん！」

プロキオンが主に次の攻撃を委ねる。

頭上攻撃から無事に着地したAゼロノスは両腕を引いた状態でDバレットを手放す。

スーツと真っ直ぐに落ちるDガツシャアのグリップを順手に握る。

それだけでDバレットからDガツシャアダガーモード（以後：Dダガー）となる。

デンガツシャアやゼロガツシャアと違って組み替える必要がないのも先の二つにはない利点といってもいいだろう。

そしてその二本のDダガーのグリップを向き合わせてそのまま寄せて連結させる。

上下に刃があり、フリーエネルギーで少しだけ大きくなる。

Dガツシャアランスモード（以後：Dランス）へと切り替えてから、クリケットイマジンへの間合いを詰めて駆ける。

「せえいっ!!」

Dランスを袈裟に振り下ろして、火花を飛び散らせてから、

「はああっ!!」

右切上へとDランスで切り上げる。

相手に何かをさせずに繰り出した攻撃なのでクリケットイマジンは

防御をする間もなく、斬撃を食らう。

「ぐわあああっ!!」

Aゼロノスは間合いを開けるために後方へと飛びのく。中腰になって、振りかぶる。

そしてDランスを投げた。

Dランスは手裏剣のように縦回転しながらクリケットイマジンへと向っていく。

回転は次第に増していき、速度も上がる。

クリケットイマジンに回転する刃が触れる。

ガリガリガリガリと容赦なく刃が抉りながら宙を舞う。

DランスはそのままUターンしてAゼロノスの元へと向っていく。

Aゼロノスは右手をかざすとパシッとDランスを受け止めた。

火花を跳び散らせているクリケットイマジンを一瞥してから、Dランスを握った手を下ろして踵を返す。

「契約者のぞ……み……ぐうおああああ!!」

肉体がダメージに耐え切れなくなり、クリケットイマジンに爆発を起こした。

プロキオンがAゼロノスに駆け寄る。

「やりましたね! ユノさん」

「うん。それじゃ帰ろっか」

Aゼロノスとプロキオンが無敵書庫へと戻る手筈をとろうとした時だ。

彼等の前方には、なのは達が交戦したあの機械兵器が群れを成して現れた。

「アレ全部壊さないと帰れないみたいだね……」

「うえ」

Aゼロノスは向ってくる機械兵器を睨みながらDランスを分離してDダガーへと戻し、プロキオンも悲鳴のような声を上げながらも両腕から三本の爪を出現させていた。

*

第12管理世界。

生活するには問題ない場所であり、自然に恵まれて気候もよくて訪れる人間も決して少なくはない。

そのような世界に『せいおうきょうかい聖王教会』がある。

中央教堂では一人の女性が宙に映っているモニターを見ながら、打ち合わせをしていた。

『ええ。片方は無事に確保しているのですが、もう片方は爆発で発掘現場ごと消滅ロストしてしまっています』

「そうですか……」

女性は落胆するが、人命が下手に奪われていないだけマシだと思っ
て良しとする事にした。

『爆発現場はこれから調査と捜索を行います』

女性の通信相手はクロノ・ハラウンだった。

「クロノ提督。現場の方達はご無事でしょうか？」

『ええ。現地の発掘員にもこちらの魔導師達にも被害は何もありません』

「そうですか……。よかった」

クロノの言葉を聞き、女性……カリム・グラシアは安堵の息を漏らした。

『現場発掘員の迅速な避難は貴女からの指示をいただいていたからこそですね。騎士カリム』

「危険なロストログアの調査と保守は管理局と同じく聖王教会の使命ですから。名前だけとはいえ、私は管理局の方にも在籍させていた
いただいていますしね」

カリムは聖王教会教会騎士団であり、時空管理局理事官でもある。

「こちらのデータでは『レリック』は無理矢理な開封や魔力干渉を
しない限り、暴走や暴発はないと思われませんが、現場の皆さんには
十分気をつけてくださるようお伝えいただけますか？」

『はい。それでは……』
クロノは了承すると、通信を切った。

「ふう……」
通信が切れてモニターが消えると、カリムはどつと疲労感に襲われたのか両肩を撫で下ろした。

「騎士カリム。やはりご友人が心配でしょうか？」

カリムの背後から一人の修道女が声をかけた。

「シャツハ」

カリムは後ろを振り返りながら修道女の名を呼ぶ。

シャツハ・又エラ。

カリム同様。『聖王教会』に所属する修道女である。

「よろしければ私が現地までお手伝いに覗きますよ。非才の身ながらこの身に賭けてお役に立ちます」

シャツハは謙虚ながらも、自身の意思を表に出す。

「クロノ提督や騎士はやては貴女の大切なご友人。万が一の事があつては大変ですから」

カリムはシャツハの言葉を聞きながら、抱えた不安が消えていくように感じた。

「ありがとうシャツハ。でも平気よ」

カリムはシャツハに顔を向ける。

「はやては強い子だし、今日は特に祝福リンフォースの風はもちろんヴォルケンリッター守護騎士達も一緒に、はやての幼馴染の本局のエースさん達も一緒にだとか」

カリムが根拠を打ち明ける。

「それは私の出番はなさそうですね。大人しく貴女のそばについているとしましょう。あと、お茶をお淹れしますね」

「ええ。お願い」

シャツハは恭しく頭を下げてから、望むことを告げるとカリムは笑顔で応じた。

第二話 「舞台表と舞台裏」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

ヴォルケンリッター達もまた機械兵器と交戦する。

無事に任務が完了し、転送ポートへと向う中で

機械兵器と戦っているAゼロノスとプロキオンを発見する。

Aゼロノスはどのような対応をするのか？

第三話 「ファーストコンタクト」

第三話 「ファーストコンタクト」(前書き)

いつも読んでくださっている皆様。

お気に入り及びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくださっている皆様。

前書きのコーナー。

何にしようか悩んでいます。

第三話 「ファーストコンタクト」

『仮面ライダー』

力なき者達には『希望』となる。

力持つ悪には『恐怖』と『絶望』が降りかかる。

そして自身が名乗るのではなく、他者に呼ばれた時に初めて価値を持つ『称号』でもある。

*

第162観測指定世界定置観測基地。

「発掘員の方は観測隊が無事に確保しました」

グリフィス・ロウランがマイクを片手に状況を説明していた。

「なのはさ……高町二等空尉達護送隊は妨害を避けて運搬中です」

シャリオ・フィニーノがモニターを見ながらアースラへと報告していた。

「あと、別区域で出現したイマジンは一体がロストしています。恐らく青い仮面ライダーが倒したと思われます」

グリフィスが締めくくるようにAゼロノスの事も報告した。

*

観測指定世界の軌道上に佇んでいる次元航行艦アースラ。

「はい了解。現場とアースラは直通通信が通らなくなっているから、シャリーとグリフィス君で管理管制をしっかりね」

エイミー・リミエッタが報告を受けながらも、先輩としてアドバイ

スを送った。

『はい!』

グリフィスが即座に返事する。

『あ、現場の方にヴィータさん達が到着したようです』

そう言うと、モニターに映るシヤリオの姿が消えた。

「クロノ君。どう思う?この仮面ライダーについて……」

エイミーがグリフィスが送ってきた映像データをモニターに映す。

それはAゼロノスとプロキオンがクリケットイマジンと戦闘している映像だった。

「明らかに良太郎やモモタロス達、桜井侑斗とは別人だな。自身の火力不足を熟知しながら的確にパートナリーイマジンと連携して戦っている。あの二組にはない戦法だ」

クロノ・ハラオウンが手を顎に当てながら、映像を凝視しながら分析する。

「確かに良太郎君やモモタロス君達のような派手さはないよね。それに桜井君のような豪快さもないしね」

エイミーが映像を見て思った事を口に出す。

「管理局にスカウトするには極めて困難な存在だな。『電王』ではなく『ゼロノス』なんだからな」

クロノも六年前の際に仮面ライダーゼロノスを知っているため、映像に映っているのはタイプの『電王』ではなく『ゼロノス』に近いからそのように呼んでいる。

「さしずめ、『青いゼロノス』ってところ?」

エイミーが便宜上の呼称を決めた。

「そんなところだろうな……」

クロノはAゼロノスの変身者の心境を想像してみた。変身するたびに周囲の人間が変身者を忘れていく事。

しかし変身者自身は周囲の人間を憶えているというズレ。

その恐怖に常に向き合わなければならぬ覚悟。

並の人間では到底できない事だろう。

仮にスカウトをしても時空管理局には『青いゼロノス』に見合う代価を払う事が出来ないのは事実だ。

金銭や権力程度では到底対価とは呼べないだろう。

「エイミー」

「わかっているって。青いゼロノスについて分析してみるよ」

エイミーがモニターに映っているAゼロノスについて分析を始めた。

*

「ひでえなこりゃ。完全に焼け野原だ」

騎士服姿のヴィータとシャマルがシグナムとザフィーラ（獣）と合流して、周囲を見回した。

彼女の言うように、巨大なクレーターが一つ出来上がっており建造物等はその機能を果たす事は永遠に叶わなくらいに破壊されていた。

「かなりの範囲に渡っているが、汚染物質の残留はない。典型的な魔力爆発だな」

シグナムがクレーターが出来た大まかな原因を告げた。

「ここまでの話を総合すると、聖王教会から報告・依頼を受けたクロノ提督がロストロギアの確保と護送を三人に要請」

シャマルが宙にモニターを表示して、シャリオとこれまでの出来事をおさらいを始める。

「平和な任務と想っていたらロストロギアを狙って行動しているらしい機械兵器が現れて、こちらのロストロギアは謎の爆発って流れで合ってるかしら？」

『はい！合ってます！』

シャマルが確認するように訊ね、シャリオが首を縦に振りながら肯定した。

「聖王教会といえば、主はやてのご友人の……」

「うん。多分騎士カリムからの依頼ね。クロノ提督ともお友達だし」

シグナムが『聖王教会』というフレーズから何かを思い出し、シヤマルが補足した。

ザフィーラが現場をじっと見たまま動かないヴィータに気付く。

「ヴィータ。どうかしたか？」

「ザフィーラ。別に何でもねーよ。相変わらずこーゆー焼け跡とか好きになれねーだけさ」

ヴィータの表情はどこか憂いを秘めていた。

「戦いの跡はいつもこんな風景だったし……。あんまり思い出したくねえことも思い出すしさ」

ヴィータの脳裏にはある出来事が甦っていた。

雪が降っている次元世界。

自分は瀕死の重傷になっている一人の魔導師を抱き上げて、必死に声をかけていた。

魔導師は息も絶え絶えになりながらも、自分の事を気遣ってくれていた。

普段なら鬱陶しいと思ってしまうが、この状況下でそんな風に思えるほど自分は非情ではなかったようだ。

主である八神はやて以外で涙目になったのはこれが初めてなのかもしれない。

白がメインカラーとなっているバリアジャケットは所々がくすんでいたり、血が赤いシミとなっていた。

その瀕死の重傷を負っている魔導師とは高町なのはだった。

「ヴィータ。何を怖い顔をしている」

シグナムが背を叩く事で、ヴィータは現実に戻った。

「リインが見たら心配するぞ」

シグナムはヴィータの頭を穏やかな表情で撫でながら気遣う。

それは『ヴォルケンリッターのリーダー』というよりは『八神家の家族の一員』という意味合いの方が強いと思われる。

「うるせーな。考え事だよ。あと撫でるな……」

ヴィータはぶすつとしながら返す。

「よし……。調査魔法陣展開！アースラと無限書庫に転送してね！」
「はい！」

シヤマルはベルカ式の魔法陣を展開しながら、シヤリオに送った。

*

護送隊飛行ルートの四名はというと。

寄り道せずに荷物であるロストロギアを持って、空を駆けていた。

「えーと。もう一度確認するです」

なのはの左肩に乗っかっているリインが『夜天の魔導書』に記していた。

「AMFというのアンヌキワシゲルドはフィールド防御の一種なわけですよ？フィールド系というのは……」

「基本魔法防御四種の内の一つだね。状況に応じて使い分けたり組み合わせたり、あと私達のバリアジャケットやリインの騎士服もバリアやフィールドを複合発生させているんだよ」

なのはが追加説明した。

基本魔法防御には『バリア』、『シールド』、『フィールド』、『物理装甲』がある。

『バリア』は攻撃を防御膜で相殺して柔らかく受け止めることを旨とする最も汎用性の高い防御。

『シールド』は攻撃と相反する魔力で固く弾く・反らす事を旨とする防御。

『フィールド』は範囲内で発生する特定効果（温度変化等）の発生を阻害する事による防御で、通常は複数の種類を重ねバリアやフィールドの補強として使用するものである。

『物理装甲』は素材強度による物理的防御。つまり魔法を用いずに直接防ぐものである。

リインはサラサラと『夜天の魔導書』に記していく。

「AMFはフィールド系ではかなり上位に入るけどね」

なのはの言うように、フィールド内に入った魔法を無効化にするのだから下位であるはずがない。

「魔力攻撃オンリーのミッド式魔導師は咄嗟に手も足も出ないだろうね」

「ベルカ式でも並の使い手なら威力増強は武器の魔力に頼っている部分が多いし、ただの刃物や鈍器やと潰すんは辛いんよ」

「フェイトとはやてはミッド式魔法、ベルカ式魔法でもAMFを攻略するのは至難なものだと打ち明ける。

「でも、なのはさんやフェイトさんは簡単に……」

「リインが両手を広げてドカーンという表現をする。

「距離があつたし、向こうのフィールドが狭かったからね」

「なのはが先程の戦闘の事を思い出していた。

「さっきのやり方だと発動地点がフィールド外じゃないとダメなんだ」

「先程の戦闘でなのはとフェイトは機械兵器が発生させたAMFの外で魔法を発動させていた。

「囲まれたりしてフィールド内に閉じ込められたら結構ピンチだね。AMF内で魔法を発動するのは難しいから」

「仮に魔導師がAMF内にいた場合、フィールド内では魔法が結合しないため効果そのものを起こす事が出来なくなるのだ。

「そうになると、魔導師の基礎体力で勝負になる。」

「飛行や基礎防御もかなり妨害されちゃうし、やり方はあるけど高等技術なんだ。リインは気をつけないと大変な事になるよ」

「なのはの説明にフェイトが補足しながらも、リインに忠告した。

「はうあ！？そうでした！リインは魔法がないと何もできないんです」

「リインがフェイトに忠告され、AMF内にいる自分を想像していた。

「いい機会だからその辺の対処と対策も覚えておこうね」

「はいです！あの、なのはさん」

「ん？なあにリイン」

「電王さんやゼロノスさんだったらどうなるんでしょうか？」
リインが電王やゼロノスならばどのように対処するのか興味を持ったのか訊ねてきた。

「そうだねえ。良太郎さん達なら私達みたいに変に考える必要はないから、はやてちゃんと言った刃物や鈍器で直接潰すだろうね」

「それってAMFの中でもですか？」

「うん。良太郎さん達は魔導師じゃないからAMFの事なんて関係なく戦えるからできるんだよ」

「良太郎達は魔法とは違うエネルギーで戦っているからAMFそのものが効果がないんだよ」

「私等が知る限りでは『最強』やいうてもおかしいね」

なのはとフェイトの説明をリインは聞きながら、『夜天の魔導書』にメモしていく。

「リイン。いい機会やから高町教導官に教えてもらおうやで」

「はいです！」

はやてが締めくくり、リインが元気よく返事をした。

*

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラは飛行はせずに、足でその場を歩いて警戒していた。

現在の所は怪しい魔導師も機械兵器もイマジンも姿を現してはいなかった。

「そっぴやシグナム。一緒の任務って結構久し振りだな」

暇といえば失礼だが、無言でいる必要はないのでヴィータは口を開いた。

「そっぴや。我々みな担当部署が離れてしまったからな」

シグナムはヴィータに言われるまで失念していた。

「あたしとシャマルは本局付きでザフィーラはもっぱらはやてかシヤマルのボディガード。ま、家に帰れば顔を合わせるし関係ねーけ

どな」

「確かに。緊急任務がない限り休暇には皆揃うしな」

ヴィータは自分達の状況を言い、シグナムは首を縦に振って腕組をして納得していた。

「しかし来年には引越しか。海鳴のじーちゃん、ばーちゃんともお別れになるなあ」

寂しそうにゲートボール仲間の老人達をヴィータは思い出す。

海鳴ではやて以外に出来た多分最初の『友達』だ。

「住所が変わるだけだ。今生の別れというわけではなからう。会いたいと思えば会えるさ」

シグナムは前向きに考えるようにヴィータに諭し、ヴィータは黙って首を縦に振る。

「ちよつと間が開いたらもう変身魔法でも使わねーと会えねーな。

育たねえから心配される……。実年齢だけならじーちゃん達より上なんだけどな」

ヴィータは呟く。

「違うない」

シグナムも自身の掌を見ながら同意した。

ヴォルケンリッターは精神的に成長を遂げてても外見が成長する事はない。

良い解釈をするならば『不老』ととれる。

ただし悪い解釈ならば『化け物』のレツテルを貼られても仕方がない。

実情を知る者ならばその手の事には触れたりほしくない。

しかし、ヴィータの友達の老人達やシャマルの井戸端会議の主婦達、シグナムが講師を勤めている剣道場の同僚などがそのような事を知っているはずがない。

だからこそ時が経って海鳴に訪れた際には外見をある程度は変えておく必要がある。

「あー、じゃあ私がちゃんと調整して可愛く育った外見に変身さ

せてあげる」

シャマルが笑顔でヴィータにしてみれば出来るなら関わりたくない
笑顔を向ける。

「……いい。自分でやる」

「私達は当分は服装や髪型程度で誤魔化せるだろうな」

ヴィータは否定し、シグナムは魔法を用いずに済む対策を言う。

「ザフィーラはいいよな。犬だから」

「……狼だ」

ヴィータはこの手の事を考えずに済むザフィーラを羨ましがる。

ヴィータは知らない。ザフィーラはザフィーラで苦労がある事を。

いつまでも子犬というのも怪しまれるため、微妙な大きさを考えて
おかなければならないのだ。

この手の事は先輩に当たるアルフに聞いてみようと考えていた。

「それにしてもミッドへの引越しは色々と不安も多いのよ。いい物
件もまだ見つかっていないし……」

シャマルは左手を頬に当てながら、家庭関係で悩む主婦のような仕
種をする。

家賃と部屋割り。

ご近所付き合い。

交通の便宜。

引越しの際に持っていく物等など。

「その辺はお前に任せた」

シグナムとヴィータは声を合わせて丸投げした。

「……」

ザフィーラが何かを感じたのか、顔を上げた。

「ザフィーラ。どうした？」

「森が動いた。座標を伝える。シャマル調べてくれ」

「うん！」

ヴィータの問いにザフィーラが短く答えながらも、シャマルに指示
を出した。

『こちら観測基地！先程と同系と思われる機械兵器を確認！地上付近で低空飛行しながら北西に移動中。高高度飛行能力があるかどうかは不明ですが、護送隊の進行方向に向っているようです！狙いはやはり……ロストロギアなのではないでしょうか？』

「そう考えるのが妥当だな。主はやてとテストロツサ、なのはの三人が揃って機械兵器ごときに不覚を取るとは万に一つもないだろうが……」

「運んでいるものがアレなものね……」

シヤリオの報告を聞きながら、シグナムとシヤマルの表情は真剣なものになっていた。

「こつちで叩きましょう」

「ああ」

シヤマルの提案にシグナムは異論を唱えなかった。

どこか気負っているような雰囲気を漂わせているヴィータがいた。

「観測基地！守護騎士から二名出撃する！シグナムとヴィータが迎え撃つ！」

シグナムがヴィータの背を叩きながら告げた。

「あに勝手に決めてんだよ」

「何だ？将の決定に不服があるのか？」

「……ねーけど」

我に返ったヴィータはシグナムを睨む。

「こつちは二人で大丈夫」

「危機あらば駆けつける」

シヤマルは笑顔でザフィーラはいつもの表情でこれから出撃する二人を見送ろうとしていた。

「守るべきものを守るのが騎士の務めだ。行くぞ。その務めを果たしにだ」

「しゃーねーなあ！！」

シグナムの言葉にヴィータは表面上は面倒臭そうに答えた。

「主はやて。シグナムです。邪魔者は地上付近で我々が撃墜します」

シグナムは、護送隊のはやてにこれからの事を告げる。

「テスタロツサ。手出しは無用だぞ」

「はい……。わかってます。シグナム」

ついでにフェイトに付け足した。

「なのは。オメーもだぞ」

「はあい。片手塞がってるしね」

ヴィータがなのはにも釘を刺しておいた。

「二人とも、おーきにな。気をつけるんやで」

「はい」

「うん！」

はやての激励と気遣いの言葉に二人は頷く。

「シグナム。AMFの話は聞いてると思いますけど、気をつけてくださいね……」

「テスタロツサ……。貴様、誰に物を言っている？己が信ずる武器を手にあらゆる害悪を貫き、敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ」

シグナムはフェイトの忠告が杞憂だと言いながら、レヴァンティンを鞘から抜剣する。

「魔導師達みてーにゴチャゴチャやんねーでもストレートにブツ叩くだけでブチ抜けんだよ！！」

ヴィータが強気な表情を浮かべながらグラーフアイゼンを構える。

「リインもあたしの活躍、しっかり見てろよ！」

「はいです。ヴィータちゃん」

リインにもしかと見ておくように言う。

「「出撃！！」」

シグナムとヴィータが空を翔けた。

「機械兵器、移動ルート変わらず。あまり賢くないようですね」

「特定の反応を追尾して攻撃範囲にいるものを攻撃するのみのようです。ですが対航空戦能力は未確認です」

「お気をつけて！」

シャリオとグリフィスの実況を聞きながら、シグナムとヴィータは

宙で戦闘態勢をとっていた。

「未確認なのはいつものことだ。問題ない」
アンノウン

シグナムは特に驚く様子もなく告げながら、前を睨んでいた。

「……………」

ヴィータはあの時の事を思い出していた。

（あの日、なのはを襲ったヤツも未確認だった）

ヴィータの拳がブルブル震える。

（あたしもなのはもいつも通りのはずだった。問題なんて何もなければずだった）

グラーファイゼンを握る力が強くなる。

（誰もが認める無敵のエースがいつもどおりに笑ってたから。だから気付かなかった……………）

左手に小型の鉄球を出現させる。

（あんなのは……………あんな思いはもう二度と……………）

小型の鉄球が宙に浮いてクルクルと回転を始める。

血みどろになって息も絶え絶えになっているなのはの姿を思い出して、ヴィータの表情は険しくなる。

「だからまとめてぶっ潰す！！」

ヴィータは宣言と直後に鉄球を機械兵器に向って投げつけた。

シグナムもレヴァンティンを直剣のシュベルトフォルムから蛇腹剣状態のシュランゲフォルムへと切り替えて、機械兵器に向って繰り出していた。

ドオオオンという爆発音が響いた。

*

アースラ艦内のメインモニタールームでエイミィとクロノがAゼロノスの分析をしながらも、シグナムとヴィータの戦闘ぶりをモニター

「で見ていた。」

「シグナムとヴィータはやっぱり凄いね。未確認でもモノともしない」

エイミーが無難な感想を述べた。

「合流地点までもう少しだし、そろそろアースラも回収の準備もしとこうか」

クロノは黙ったままだ。

「クロノ君。どうしたの？難しい顔をして」

「……ああ。この後のことを考えていた」

「あと？」

「それよりもこの青いゼロノスについて何かわかった事は？」

クロノは話題を切り替えてAゼロノスについての調査結果を聞く事にした。

「まずこの姿はバリアジャケットでも騎士服でもないね。真正正銘魔力以外のもので構築されてる。次にこのゼロノスの使っている武器は材質のサンプルでもあればもっとわかるんだろうけど、電王じゃなくてゼロノスが使っている武器と同じ材質と見ていいね」

電王、ゼロノスのデータがないためこれが初の『仮面ライダー』のデータとなる。

「AAAランクの魔導師と照合しても凄いという言葉しか出ないね。全く劣ってないもん」

「今のところはイメージを倒すだけが目的みたいだが、今後どう出るかはわからないな……」

クロノは変身者が何かをやらかすのではないかと考える。

「でも何かをやらかすつもりなら既にやってるような気がするよ。」

このゼロノスだって『時の列車』持つてるはずだし」

「それもそうだな……」

エイミーの言うとおりだと納得したクロノは任務に集中する事にした。

*

護送隊の四人はというと、空を駆けたままだった。

「シグナム達は大丈夫そやね」

「うん」

「シグナムもヴィータちゃんもカッコいいです」

「だね」

はやてとフェイトは現在戦っている二人の心配は無用だといい、リインはなのはと共にその二人の活躍ぶりを宙に出現させているモーターを見て喜んでいた。

「はやて。特別捜査官としてはどう見る？今回の事」

「んん？そうやなあ。あのサイズのAMF発生兵器が多数存在してるゆーんが一番怖いなあ。今回、この世界に出現してるんが全部であつて欲しいけど……」

はやては話を振られるものの、冷静に的確に特別捜査官としての意見を告げる。

「そうでないなら規模の大きな事件に発展する可能性も十分にある。特に量産が可能だったりするとなあ。執務官と教導官はどんなやる？」

はやてはひとしきり言い終えると、今度はなのはとフェイトに訊ねた。

「私はあの未確認がロストロギアを狙うように設定されているのが気になるよ。猟犬がいるって事は狩人がいるって事だもんね」

教導官としての、なのはの感想は機械兵器の後ろにはロストロギアを狙う誰かがいるという事だ。

機械兵器がニワトリのように卵からポコポコ生まれてくるわけではないので、必ず製作者がいると踏んでいるのだから。

「ロストロギアを狙う犯罪者……。技術者型の広域犯罪者は一番危険だね」

フェイトが執務官としての感想を述べる。

それから五分後に護送隊はヴォルケンリッターと合流した。

*

アースラ艦内ではクロノとエイミイが今後の事を話し合っていた。

「そういつた事件になると管理局でも対応できる部隊はどれくらいあるか、人や機材が揃ったとして動き出せるまでどれくらいかかるのか、そんな状況を想像すると苦い顔にもなるさ……」

クロノは手を顎に当てて、難しい顔をしていた。

「なるほど。指揮官の頭の痛いトコだね」

エイミイがため息をついてしまう。

組織の体制からしてお先真っ暗なのかもしれないのだ。

「はやても指揮官研修の最中だからな。一緒に頭を悩ませる事になるよ……」

「でもまあ、今回の事件資料と残骸サンプルはそのテの準備の貴重な交渉材料でしょ。事件がどう転ぶかわかんないのなんていつもの事だし」

「それはそうなんだがな

ブレシアテスタロッサ

「なんとかなるよ。『P・T事件』も『闇の書事件』もその後の色々な事件の後も、みんな何とかしてきてるんだもの」

頭を抱えているクロノに対して、エイミイは前向きに考えるように促した。

*

なのは、フェイト、はやて、リインはヴォルケンリッターと合流して喜び合っていた。

任務もほぼ完了して、第162管理世界転送ポートへと向おうとしていた時だ。

『こちら観測基地！転送ポートへと向う進行ルートに先程の未確認

が出現。一つの箇所に集まろうとしています！その数五十いえ百、に、二百です！！」

シャリオの報告にその場にいる誰もが目を丸くしている。

自分達に向って襲い掛かってきたのでもせいぜい十体くらいだ。

その二十倍が一箇所に集まるなんて余程そこには何かがあるのだからと考えるのは自然な事だった。

「そこには何かあるの？」

なのはが代表してシャリオに訊ねる。

『ちよつと待つてください……。あ、いました！多分ですけどその機械兵器は青い仮面ライダーを標的にしてるんじゃないかと思われ
ます！！』

その単語にそこにいる誰もが心動かされたのはいうまでもないことだ。

正体不明にして神出鬼没。

イマジン現れる所必ず出現する謎の戦士。

『ハラオウン提督からです。その青い仮面ライダーの救援に向うようにとの事です』

了解！

その場にいる誰もがその命令に従った。

*

見渡す限りの機械兵器。

一つ目も二百あると気持ち悪い。

「うえ〜。怖いですよ。ユノさん」

プロキオンが機能停止した機械兵器を爪から引き抜いてから踏みつけると、Aゼロノスに何とかしてほしそくに訴える。

「流石にあんなにたくさん相手するとなると気が滅入ってきそうだ

ね……」

そう言いながらもDランスを分離して、Dバレットに切り替えてからひたすら引き金を絞る。

銃口から放たれた無数の光線は機械兵器の腹部を貫いていく。貫かれて機能停止した機械兵器はバタバタと倒れていく。

Dバレットは引き金を一回絞る事で五発の光線が発射される。

それらは確実に四発は命中しているので一回で四体は機能停止していることになる。

「よぉーし！僕もやります！！」

主が頑張っているのに自分が怠けるわけにはいかないと感じたプロキオンは中腰に構えて、機械兵器に向っていく。

殴る。蹴る。投げ飛ばすとこの三つでドオンともボオンとも音を立てて蹴散らしていく。

プロキオンの足元には機械兵器の残骸ばかりが落ちていく。それでも前を見ると、減っていく気配がまるで感じない。

「！！ユノさん！なのさん達がこっちに向ってきます！！」

プロキオンはモモタロスとは違うモノを感知する嗅覚を持っている。モモタロスがイマジンの臭いを探る事が出来るのに対して、プロキオンは魔導師の匂いを探る事が出来る。

「どのくらいで来るかわかる？」

Aゼロノスが至近距離なのでDバレットからDダガーへと切り替えて、機械兵器の腹部を突き刺す。

バチバチバチツと音を立てて機能停止する。

「匂いの距離からして二分後です！」

そう言いながらも迫ってくる機械兵器を倒していく事はやめない。

「二分か……」

Aゼロノスがプロキオンの報告を聞いて、思索する。

恐らくこの機械兵器の異常な数は伝わっているはずだ。

そして自分達が戦っている事もだ。

そうなると時空管理局の魔導師である以上、救援に向ってくるのは

自然の流れといえる。

（正直救援してもらえるのはありがたいけど……）
Aゼロノスは本音としては救援はありがたいが、何かと面倒な事になる事も予測できていた。

（間違いなく職質（職務質問）を受ける事になるね……）
助けた見返りというわけでは間違いなく、そのような流れになるだろう。

プロキオンが爪で機械兵器を突き刺して、投げ飛ばして後方の機械兵器数体を誘爆させていた。

「そこの仮面ライダーさんとイマジンさん！！」

上空から声がしたので、Aゼロノスは顔を上に向ける。

なのはを始めとする魔導師陣営だった。

「どうしましょう?」

プロキオンがAゼロノスの側まで寄る。

「こうなったら乱暴だけこの手しかない!!」

Aゼロノスは左手に握られているDガツシャーをダガーからバレットへと切り替えて、空へと向ける。

そして引き金を絞る。

無数の光線が空を昇った。

「ひゃああ!!」

なのはは思わず、後方へと反射的に退がる。

救援に向おうとしたなのは達の前に一直線に無数の光が走ったのだ。

「なのは！大丈夫か!？」

グリータは気遣うと同時にAゼロノスを睨み、グラーファイゼンを構えていた。

シグナムもレヴァンティンを抜剣しようとしていた。

「当てる気がない?」

「何でそう思うん？フェイトちゃん」

フェイトの呟きをはやてが聞き逃さなかった。

「あの位置からなら確実に当てる事はできたのに、そうしなかった。威嚇かもね」

「私達を現場に近寄らせないようにする事？」

シヤマルの言葉にフェイトは首を縦に振る。

「でも、いきなり威嚇射撃するのはどうかと思うけど……」

なのはは乱暴な手だと言う。

「拒む理由があるのかもしれない……」

ザフィーラが推測する。

「それにしてもあの仮面ライダー……。ゼロノスに似てるなあ。とりあえずいきなり撃つてくるところからして、私等の救援を望んでないって事になるからしばらく様子見やな」

はやてはAゼロノスを全体をしたから上へと舐め回すようにしながら感想を述べながら、その場で待機を選ぶように皆に伝える。

「うん。そうだね」

なのはも首を縦に振って、Aゼロノスとプロキオンの戦闘を凝視する事にした。

救援に向ってくるアースラチームに向けて『威嚇』目的で光線を放ったAゼロノスは宙で留まっている様子を見てから、すぐに正面へと視線を向けた。

その間にもプロキオンが機械兵器を持ち上げて、膝に向って下ろして『へ』の字にさせていた。

「残り百体くらいかな……」

「やりますか？」

プロキオンは、なのは達がいるのでAゼロノスを『ユノさん』とは呼ばない。

「おいで！プロキオンー！！」

「はい!!」

Aゼロノスはゼロノスベルトのチェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードを抜き取り、裏返す。

青色のカラーから白色のカラーの面に変えた。

バイオリンで奏でているミュージックフォーンが流れる。

そして、クロスディスクに向かってゼロノスカードをアプセットした。

『シリウスフォーム』

ベテルギウスフォームの電仮面が消え、プロキオンがフリーエネルギー体となってAゼロノスの体内へと入り込む。

上半身に、白色がメインで裾に青色のポイントカラーがされている袖のないロングコート――プロキオンクロークが出現する。

両肩には三本の爪のような飾りが施され、両下腕にはプロキオンが用いていた武器であるプロキオンクロークが装着されていた。

プロキオンクロークの背部にはプロキオンの顔が出現しているが、これはデネブ同様に『飾り』だったりする。

そして電仮面にはミサイルの弾頭部分がAゼロノスのデンレールを無視して、中央に走り出して停止すると回転しながら六芒星状に展開して電仮面となる。

仮面ライダーANOTHERゼロノスシリウスフォーム（Sゼロノス）の完成である。

「はああっ!!」

Sゼロノスを中心に小さなクレーターが出来た。

タンタンタンとリズムカルに両足をその場で動かす。

そして……

「ゴオオオオ!!」

プロキオンが主人格となっており、Sゼロノスはプロキオンクローを構えて機械兵器へと向かっていった。

「イマジンと一体化して戦うところまでゼロノスと同じなんて……」
はやては先程のフォームチェンジを目の当たりにして目を丸くしていた。

心なしかはやてはどこか落ち着かない様子だった。

「はやてちゃん。大丈夫？」

なのはがそんな様子のはやてを心配する。

「う、うん。大丈夫だよ。あのゼロノスは侑斗さんやデネブちゃんじゃないって事はわかってるて」

はやては笑みを浮かべて返すが、内心穏やかではない事をなのはは簡単に予測できた。

（はやてちゃんが一番気にしてるのは、ゼロノスの変身に必ず消費するゼロノスカードにおける変身者に対する記憶の消費……）
なのはは知っている。

桜井侑斗から貰った一枚のゼロノスカードを見るとき、『懐かしさや『恋しさ』と同時に『決意』のようなモノが表情に宿っている事を。

（もし私の知っている人達がゼロノスカードを使っていたとしたら……）
なのははもしものを事を想像し、正直ゾツとする結果だった。

『変身者に関する記憶』を周囲が忘れる事を承知で使う変身者は怖い。

『忘れてしまう』という事すら忘れてしまう自分も恐ろしく感じた。
ゼロノスカードを使用する事に関してはどちらもが被害者であり、加害者でもある。

（ユーノ君だったらどうい風な事言うかな……）
今起きている事をユーノ・スクライアに言えばどのような返答が出るかをなのははSゼロノスの戦闘を見ながら考えていた。

機械兵器を蹴飛ばし、踏みつけ、寄ってくる場合は回し蹴りで機能停止させていた。

眼前に迫ってくる場合はプロキオンクローで突き刺す。

「うりゃああああああ！」

これまでの戦闘でわかる事はSゼロノスは一度たりとも機械兵器に攻撃をさせていない。

攻撃を受ける前に全て機能停止させているのだ。

まさに『攻撃は最大の防御』という格言をやつてのけているのだ。

(あと二十五体。踏ん張つてプロキオン！)

「はい！！！」

深層意識のユーノがSゼロノスに励ます。

それから十分後に残り二十五体の機械兵器もみな地面に転がる事になった。

「終わりました！」

Sゼロノスはそう言いながら、チェンジレバーを右にスライドさせてゼロノスカードをまた裏返してベテルギウスフォームへと戻す。プロキオンとAゼロノスへと分離する。

直後に空の一部が歪んで線路が敷設されていく。

空間からAゼロノスとプロキオンに向つて三両編成の『時の列車』であるANOTHERライナー(以後：Aライナー)が停車した。一両目であるAライナー・ミサイルのドアが開いていた。

乗り込もうとするAゼロノスとプロキオン。

「ま、待って下さい！」

なのはが呼び止めた。

プロキオンが先に乗り込み、Aゼロノスは足を止める。

「あの、貴方は一体誰なんですか？」

なのはが単刀直入に訊ねてきた。

「ANOTHERゼロノス」

「僕、プロキオンです！」

なのはの質問にAゼロノスとプロキオンは素直に答えた。

「艦に戻るまでが任務じゃないの？気を抜いちゃダメだよ」

Aゼロノスはからかうようにして、なのはに告げるとAライナーに乗り込んだ。

ドアが閉まり、車輪が回り始めて走り出した。

仮面ライダーANOTHERゼロノスと高町なのはのファーストコンタクトはこのようにして幕を閉じた。

なのはは知らない。

自分がフェイトやはやてのような運命に巻き込まれようとしている事を。

なのはは知らない。

Aゼロノスの正体が最も近い存在である事を。

第三話 「ファーストコンタクト」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

食事会に合流するために駆け足でアースラへと向う
ユーノとプロキオン。

その頃、クロノとヴェロツサはロストロギアや
Aゼロノスの事を語り合っていた。

盛り上がるアースラ艦内。
その中でユーノ、プロキオン、アルフ、シャマル、
ザフィーラも話していた。

第四話 「打ち上げ」

第四話 「打ち上げ」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入りおよびユーザー登録をしてくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

今回からはこの前書きで『作者が気になるキャラクター達』というものをやりたいと思います。作者の独断と偏見で選び、毒舌ありで紹介しますのでお目汚しになるかもしれませんがご了承ください。

旗本の方達(暴れん坊將軍 水戸黄門)

時代劇の悪党といえば代官に商人について武士である旗本でしょうね。

代官や商人は悪とはいえ、まだマシですよ。

自分の欲望に純粹なんですから。

でもこの旗本達というのは始末が悪い。

アホな割にプライドが高く、自信の境遇を他者のせいにして世の中の逆恨みですからね。始末に終えませんよ。

第四話 「打ち上げ」

モニュメントバレーを髣髴させる荒野の中を三両編成のAライナーが線路を敷設・撤去の工程を繰り返しながら走っていた。

Aライナーはゼロライナーと同じく黒色をメインにしてポイントカラーを青色にしている。

一両目はネドケラトプスの先頭部になっているAライナー・ミサイル（以後：Aライナー）。

二両目は翼竜系のダルウィノプテルスが先頭部になっているAライナー・ガトリング（以後：ガトリング）。

三両目はT-REXの頭部がモデルになっているAライナー・マガジン（以後：マガジン）である。

Aゼロノスとプロキオンは二両目のガトリングに乗っていた。Aゼロノスはゼロノスカードを抜き取ってゼロノスベルトを外す。

ゼロノスカードがシュウウウという音を立てながら消滅しながら、Aゼロノスからユーノ・スクライアへと姿を戻す。

プロキオンも身体全体が光り出してイマジンモードからフェレットモードへと変身する。

Aライナーは『時の空間』を抜けて、真っ暗な部屋に抜け出た。『時の空間』は穴を閉じてしまう。

プシュウウウウウと音を立てて停車した。ここは司書長室から通じる地下格納庫である。

ここ存在を知るものは時空管理局の中でもごく僅かに限られている。

ガトリングのドアが開いて、ユーノとプロキオンが降りた。

プロキオンは専用席といわんばかりにユーノの左肩に乗っている。司書長室へと繋がるエレベーターに乗る。

キュイイイインという音を立てて、昇っていく。

エレベーターが止まると降りて、自動で本棚が動いて司書長室へと

足を踏み入れる。

ガーツと本棚がスライドして元の位置に戻る。

「おかえりい。ユーノ」

アルフ（幼児）が出迎えてくれた。

「アルフ。僕の不在時に何かあった？」

「いつもの通りさ。クロノが訊ねてきたけど、何とか上手く誤魔化しといたよ」

「そっか。ありがとう」

「ありがとうございます。アルフさん！」

ユーノが軽く礼を言い、プロキオンは深々と頭を下げた。

「アンタは相変わらず礼儀正しいねえ。本当にモモタ口達と同じイマジンなのかい？はやてがおデブをイマジンなのかって疑った事あったけど、まさかあたしがそんな心境になるとはねえ」

アルフはプロキオンがイマジンである事を知っている。

もちろん、ユーノが何故Aゼロノスになったのかもだ。

「僕、イマジンですよ」

プロキオンはアルフに自身がイマジンだと公言する。

「わかってるって。でも、フェイトやなのは達には絶対に言っんじやないよ？」

「はい！アルフさん」

アルフとプロキオンの会話が終わりを迎えようとしていた。

「アルフ。ロッキー。そろそろアースラに向おうか？今から行けばいい時間になるだろうしね」

「はい」

アルフとプロキオンは子供のように返事した。

*

第162世界の衛星軌道上に停滞している次元航行艦アースラ。

「護送隊と『レリック』、先程本艦に収容しました。残念ながら爆

発点からは『レリック』やその残骸は発見できませんでしたが……」
クロノ・ハラオウンがモニターに映っているカリム・グラシアに報告していた。

『お気になさらずクロノ提督。事後調査は聖王教会でも致しますので……』

カリムが笑みを崩さずにクロノに労いの言葉を送る。

「確保したレリックは厳重封印の上で自分が本局の研究施設まで運びます」

『ああ。その件なのですが、こちらから一人警護員を送りました。ご迷惑でなければ一緒に運んでいただければ……』

「ああ……。はい……」

カリムの含みのある言い方が気になるが、クロノは了承した。

ユーノ、プロキオン、アルフの二人と一匹はアースラへと転送されており、打ち上げ会場となっているレクリエーションルームへと向うために廊下を歩いていった。

「これがアースラ。広くて綺麗な所ですね」

プロキオンがキョロキョロしながら感想を述べていた。

「ロツキー。アンタはアースラに来るの初めてだったね？」

「はい。次元航行艦というものはたくさん見た事ありますけど中に入るのは初めてです」

アルフの言うようにユーノの隣にいるプロキオンは時空管理局本局をあちこち回る事が多い。

そのため次元航行艦を見る機会が多いのだ。

「あれ？ユノさん。誰か来ますよ」

プロキオンの言うように、向かいから一人の青年が歩いてきた。

白いスーツに緑色の長髪をした長身の青年である。

「アイツ、どこかで見た事あるような気がするんだけどねえ」

アルフも会った事があるのだが名前が思い出せないようだ。

「アルフさん。思い出さないとダメですよお」

「わかってるんだけど二、三回程度だったらどうしても出てこないんだよねえ」

青年がこちらに歩み寄ってくる。

「スクライア司書長？」

「アコース査察官」

青年・・・ヴェロツサ・アコースから先に話しかけ、ユーノも応じた。

「ああ、やっと思い出したよ！ヴェロツサ・アコースだよ！本局の査察官！」

「正解。思い出してくれてありがとう。ハラウン執務官の使い魔のアルフさん」

ヴェロツサは笑みを浮かべて返す。

「あたしを知ってるのかい？」

アルフが目を丸くしている。

「職業柄、一度会った人の事は忘れないようにしてるんだ。ん？そちらのフェレットはスクライア司書長の使い魔ですか？」

ヴェロツサがプロキオンに目を向ける。

「あ、はい。僕ユノさん、じゃなかったユーノ・スクライア司書長の使い魔でロッキーです！よろしくお願いします。査察官さん」

フェレットモードのプロキオンは世間では『ユーノの使い魔、ロッキー』として通している。

つまり『プロキオン』という本名を知らない者の方が多数なのだ。

「こちらこそよろしく。ロッキー君」

ヴェロツサが右人差し指を出して、プロキオンは小さな両前脚で掴む。

『握手』である。

「それでアコース査察官はどうしてこちらに？レクリエーションルームは逆ですよ」

「ああ。僕は義姉の頼まれ事を果たさなければならぬんで打ち上げには参加できないんですよ」

「聖王教会からですか……。それはまた……」
ユーノもまた職業柄、一人の人間の身边を調査するのは得意分野になっっている。

そのためヴェロツサの周辺は一通り把握していた。

「いえいえ。たまには義姉孝行しませんとバチが当たりますよ」
ヴェロツサはケラケラと笑いながら言う。

「バチ……ですか……」

ユーノは一瞬暗い影を落としたが、すぐに戻る。

「それではこれから知人と共に任務に行きますので失礼します。また機会があればゆつくりと話しましょう」

「ええ。そうですね」

ヴェロツサの誘いにユーノは笑顔で応えた。

（幼馴染を偽って動いている僕にも下るんだろっね。バチが……）
ユーノはそんな事を考えながら、アルフとプロキオンを連れてレクリエーションルームへと向った。

クロノがカリムの含んだ言い方を気にしながらも、警護員が待機している艦内応接室へと向っていた。

入ると、そこにはヴェロツサが思いつきり寛いでいた。

「やあ！クロノ君」

「ヴェロツサ！君だったか」

警護員が知り合いだとわかると、クロノの肩も軽くなっていた。

その証拠に表情が柔らかくなっていた。

座っていたヴェロツサが立ち上がって歩み寄る。

「久しぶりだね。先の調査行以来だ」

「ああ。元気そうで何よりだ」

再会を祝するようにして、ヴェロツサとクロノは手を握り合う。

「今日はどうした？義姉君のお手伝いか？」

クロノが席に着きながら訊ねる。

「うん。カリムが君達を心配してたから……っていうのもあるんだ

けど」

ヴェロツサが習うようにして、席に着く。

「本音を言えば面倒で退屈な査察任務より、気の合う友人と一緒に気楽な仕事のほうがいいなってね」

「相変わらずだな。君は」

ヴェロツサの本音を聞き、クロノは苦笑する。

「そうしていると局でも名の通ったやり手とは思えないからかえって怖い」

クロノが紅茶が入っているカップを手にする。

「こつちが素なだけどね」

ヴェロツサは苦笑いを浮かべていた。

「君と君の義姉君である騎士カリム。そしてはやてを加えた三人は局内でも貴重な古代ベルカ式の継承者で有用で稀少^{レアスキル}技能保有者。その上それぞれの職務でも優秀だ」

「確かにカリムは優秀だし、はやては色々凄い子だけど僕は別に、さ」

「謙遜を。ともあれ君が警護についてくれるのならありがたい。出る前にはやてに声をかけるか？」

「ああ。大丈夫だよ。お土産はもう届けてあるし」

ヴェロツサはその必要はないという感じで告げた。

「それとクロノ君。出る前にひとつ聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「何だい？」

「さっきここでスクライア司書長に会ったんだけどね」

ヴェロツサの表情は能天気なものではなく、『査察官』としての表情になっていた。

「ユーノがどうかしたかい？」

「彼ってどういう人なんだい？」

クロノはヴェロツサがどうしてそのような事を訊ねてくるのかはわからなかった。

「元フェレットもどきで『無限書庫』の司書長で、なのは魔法の師匠でイマジン達に毒されて口が達者になった奴、くらいだけど。それが何か？」

「僕の印象とは違うなあっと思ってね」

ヴェロツサは紅茶を口に含む。

「君はどういう風に思ってるんだい？」

クロノの質問に答えるためにヴェロツサはカップをテーブルに置く。

「普段は温厚で人当たりのいい人だけど、肝心な部分は決して人にはさらけ出さない上に自分の事になると人を踏み込ませない壁を作っている人かな……」

ヴェロツサのユーノに対する印象にクロノは何も言えなかった。

クロノ自身、ユーノについてどのくらい知っているかと聞かれると返答に詰まってしまう。

言われてみたらわからない部分が多い。

休日はどうのように過ごしているのかとか。

趣味は何なのかとか。

高町なのはどの仲はどのようになっているのかとか。

「六年の付き合いなのに君に指摘されるまで考えもしなかったな……」

腐れ縁で六年なだけという事を改めて認識させられた。

レクリエーションルームではというと。

和洋中とありとあらゆる料理がギッシリと並んでいた。

「おお！すごいですねえ」

「肉がある！！」

「こんなに用意されたんですか？」

「ユノさん。コレ食べてもいいんですか？」

エイミィ・リミエツタが驚き、アルフが眼を輝かせユーノが調理し

たリンディ・ハラオウンに訊ね、プロキオンがユーノに食してもいいのかと聞いてきた。

「半分はアコース君からの差し入れよ。任務を終えたエース達ですって……」

そうなると半分はリンディが用意した事になる。

「艦長……じゃないリンディさんもすみません」

エイミイが未来の義母に頭を下げながら、自身もエプロンを着用する。

「ふふ。いいのよ。私も艦を降りてから平穏な内勤職員だもん。子供達のお世話してあげたいしね」

リンディは現在のライフスタイルを満喫していた。

「そうですか」

エイミイも料理の準備に取り掛かる。

「と、言ってるそばから……」

リンディとエイミイの顔を向ける方向に、前線に向っていた面々が入ってきた。

「ただいま戻りましたー」

八神はやてが筆頭になって、声高らかに叫ぶ。

「おかえり」

「おつかれー」

リンディとエイミイが労いの言葉をかける。

「フェイトー」

アルフが主であるフェイト・T・ハラオウンに駆け寄った。

「おお！なんだこの食事の量！？」

「すごいわねー」

テーブルに乗っている食事の量を見て、ヴィータとシャマルは驚きの声を上げていた。

「この辺はアコース君から」

リンディがテーブルに乗っている食事の実状を話す。

「あ、ロツサ（ヴェロツサの事）来てるんですか？」

「クロノ君と一緒に本局まで護送だつて」

はやてにしてみてもヴェロツサ来訪は予想外だったらしい。

エイミィが来訪目的を話した。

「お疲れ様です。義母さん」

「うん」

フェイトが抱きついていているアルフの頭を撫でながら、リンディに労いの言葉をかける。

「ユーノ君、ロツキー君。三日ぶり」

「うん。なのは」

「はい！なのさん！」

ユーノと高町なのははハイタッチをする。

パンという掌同士がぶつかる音が鳴る。

ユーノとプロキオンにしてみれば三日ぶりではなく、さつき会ったばかりだがなのはは知らない。

「ロツサもクロノ君と一緒になら会いに行ってもお邪魔かなあ……」

「あの二人、仲良しさんですもんね」

はやては男同士の友情に水を差すわけにはいかないと自粛し、シヤマルはその判断が妥当だと思った。

クロノとヴェロツサは艦内応接室ではなく、転送室へと移動していた。

「最近はどうだい？次元世界の方は？」

「主要地上世界と同じさ。芳しくない」

ヴェロツサの問いにクロノは答えるが、両者共に先程のような穏やかな表情はしていない。

仕事をするときの表情だ。

「『世界は変わらず、慌しくも危険に満ちている』で、旧暦の時代から言われている通りだ」

クロノは旧暦の格言を引用した。

「各世界の軍備バランスの危うさ。世界内での紛争や闘争。それぞ

れの世界が壊れないようするだけで手一杯さ」

「陸^{おか}も相変わらずだね。危険なロストロギアの違法搜索や不法所持にさらにはそれらの密輸問題。地上はまさにそういったことの舞台だからね」

人がいる限り、どこの場所にも平和はないと言いたくなるような内容^{内容}を二人は言う。

「破滅的な力を持つロストロギアはよからぬ輩の手に落ちればすぐさま争いの道具となる……」

「そして『秘匿級』のロストロギアともなれば戦いの道具として手に入る事が出来れば……」

クロノが切り出し、ヴェロツサが続ける。

二人の目の前には輝きを出している一つの石が嚴重に保管されていた。

人を魅了する光だ。

二人はそのように思ってしまった。

「世界の『バランスを崩す』どころじゃない」

「破滅に向って一直線……ってね」

クロノとヴェロツサは最悪の事を口に出した。

「そうやって滅びた世界はいくつもあるのに、それでも自分達を守るために力を求めなきゃいけない……」

「そういう気持ちもわからなくもないんだけどね」

「しかしそれでも……」

クロノとヴェロツサは複雑な表情を浮かべている。

余程の事でない限りは自衛手段として力を求めているからだ。それを一概に『悪』と言い切るほど自分達は立派ではない。

「それを防ぐために働かなきゃならない……だろう？」

「こういう仕事を選んだ以上はな……」

ヴェロツサとクロノは決意を秘めた眼差しを向け合っていた。

「検分はもういい。封印処理を頼む」

「はい。クロノ提督」

クロノはアーススタッフの一人であるルキノ・リリエに処理を命じた。

「検査担当が誰だか聞いてるか？」

「技術局のマリエルさんのチームらしいよ。ところでクロノ君。最近噂になっている青い仮面ライダーについてどう思う？」

「青いゼロノスのことかい？」

「青いゼロノス？」

ヴェロツサは話題を変えてAゼロノスの事を切り出し、クロノが応じた。

「ああ。今日の任務で姿が明らかになつてね。僕が名付けたんだ」

「神出鬼没で正体は不明。目的はイマジンを倒す事、つまり『時の運行』を守る事と考えていいね」

「僕達の味方になると思うかい？はやては味方にはなつてほしいと言つてるけど、乗り気ではなくてね」

「無理もないさ。管理局に引き込んでイマジンが現れる度にその変身者に出動要請していたら間違いなく管理局の財政は破綻するよ」

ヴェロツサはゼロノスの変身に用いる代価を知らされていないのか、味方にはなつてほしい純粹に思っている。

対してクロノは味方になつてほしいと思いつつも、そうなつたら時空管理局の財政は破綻すると断言していた。

「財政破綻つて……。クロノ君、大袈裟すぎない？」

「いや支払う代価がアレである以上、そうなつても不思議じゃないさ」

「一体何を代価にしてるんだい？」

ヴェロツサがクロノに早く答えるように急かす。

「記憶だよ。正確には『変身者に関する記憶』を僕達周囲の人間が忘れていくんだ」

「……。だからはやては乗り気じゃなかったし、クロノ君は味方

に引き入れた場合財政破綻をしてもおかしくないって言ったんだね」
ヴェロツサはようやく義妹や友人が複雑な表情を浮かべている事を理解した。

「良太郎が言うには忘却している以上、取り戻す事はできるらしいがあまり効率的とはいえない上に僕達ではどうしようもない手段だそうだよ」

クロノはかつて野上良太郎に訊ねた事がある。

その際に『時の列車』で過去に向えば忘却した記憶を取り戻す事が出来るらしい。

だが『時の列車』を所有していない時空管理局ではその方法は使えないし、忘却した人間を捜し当ててその都度、過去に向わせるなんて非効率にもほどがあるというものだ。

「つまり一度忘れてしまったら……」

「事実上、不可能だろうね」

クロノは締めくくった。

「現在イマジンを倒す事が出来るのは青いゼロノスだけというのが余計に辛いね……」

「邪な企みを持つ偉い人は是が非でも引き入れようとするし、管理局の面子を過剰に保とうとする者は適当な罪をでっち上げて犯罪者同然に扱つかもしれないしね」

ヴェロツサとクロノはAゼロノスは管理局にとっても決して樂觀視できない存在だと言う。

Aゼロノスにとって最大の敵は半端な権力を持つ者の嫉妬ややつかみだろう。

巨大な組織にとって一番の屈辱とはたった一人によって存在を虚仮にされることだ。

それから三分後に二人は転送室から出立した。

「アースラ本局直通転送ポイントに到着。クロノ君とアコース査察官転送室から無事出立！というわけでみんなは安心して食事を楽し

んでね」

レクリエーションルームではエイミィがクロノとヴェロツサが無事に出立したと告げた。

その場にいる全員がテーブルに置かれている料理を我先にと手にしていた。

アルフは目当ての肉を手にして、かぶりついていた。

なのは、フェイト、はやての三人は「おつかれー」と言ってグラスを片手に乾杯する。

ユーノも皿に料理を乗っけていく。

その量は明らかに『無限書庫』で内勤している人間の量とは思えなかった。

誰もがその量を見て目を丸くしていた。

「?どうしたの?みんな」

ユーノは気にせず皿に盛り付けていき、口の中に放り込む。

「僕も食べまーす!」

プロキオンはユーノが盛り付けた皿の料理を食べていく。

その仕種は何とも可愛かったりする。

なのはヤリインは目をキラキラと輝かせている。

ビクツと何か寒気を感じたのでプロキオンは手にしている料理を口に含んでから専用席であるユーノの左肩に乗っかる。

「ユーノ君」

シャマルがグラスを渡してくれた。

「ありがとうございます。シャマルさん」

シャマルは笑顔で渡す。

(あの世界にいたって事は聞くまでもなくイメージがいたのね?)
直後にユーノに念話の回線を開いた。

(ええ。イメージはすぐに倒しましたがけど、その後の機械兵器があんなに現れて帰るのに手間取ったんですよ)

(そう)

(これで何枚目になる?)

ザフィーラ（獣）がシャマルの隣に寄り、念話の回線に入り込んだ。

（今月に入って三枚目です）

（ちよい待ち！アタシを抜きにして話を盛り上げるのはなしだよ！）

（僕もです！）

骨付きマンガ肉を持ったアルフも寄って、念話の回線に入り込んだ。プロキオンはイメージンであるが契約者がユーノである為かそれとも突然変異かどうかはわからないが、『念話』という手段を使う事が出来る。

「ユーノ君？」

フェイト、はやての二人が会話を盛り上がる中、なのははユーノを見た。

プロキオン、アルフ、シャマル、ザフィーラに囲まれて何かを話している姿が見えた。

ただそれだけなのに、何故だろう。

（何でだろう……。同じ部屋にいるのにユーノ君が遠い人のように感じちゃうよ……）

なのはの胸中で言い知れない不安が渦巻いていた。

第四話 「打ち上げ」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL A t Sです!!」

打ち上げが盛り上がるレクリエーションルームには
ユーノとプロキオンの姿はなかった。

なのはは胸中に過ぎる不安を解消するためにも
アースラ艦内を捜す。

ユーノとプロキオンを見つけたなのはは心底ホツと

他愛ない会話の中でユーノもなのはも安らぎを得て

する。

いた。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」(前書き)

いつも読んでくれている皆様。

お気に入りお呼びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれている皆様。

まずは作者の独断と偏見による気になるキャラクターから。

片山雛子(相棒シリーズ)

女性政治家であり、特命係にとっては『敵』に近い存在かもしれない。自分としては最も関わりたくない相手ですね。関わってもいい事はなさそうですからね。

それに、彼女のような政治家が存在できるのはある意味では平和な日本だからこそかもしれませんね。

物騒な国では即お陀仏ですよ。多分。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」

次元航行艦アースラのレクリエーションルームでは同窓会的任務が無事に終了し、打ち上げとして盛り上がっていた。

「助けてください！ユノさん！」

プロキオン（フェレット）が愛らしい表情に涙腺を浮かべながら、ユーノ・スクライアに懇願していた。

「ロツキーくん」

「ロツキーちゃん 逃げちゃ駄目ですよ」

いかにも触ってその毛並みを堪能したがっている高町なのはとリンがいた。

目がキラキラ輝いており、なのはの両手がわきわきと動いていた。

リンはサイズが小さいためか、抱き枕のようにしてプロキオンを堪能しようとしているらしい。

プロキオンがユーノの頭の上で身体を丸くして怯えている。

しかし、可愛い物好きにはそのような仕様すら心を揺さぶられる材料にしかない。

なのはとリンの瞳が更に輝いているように見えた。

「なのは、リン。ロツキーが凄く嫌がってるように見えるんだけど……」

ユーノは相棒が本気で怯えているようにも見えた。

その後景を周囲の者達は「また始った」というような表情をしており、誰も止めようとはしなかった。

「そんな事ないよ ね、リン」

「はいです。リン達はロツキーちゃんのカカフカな毛並みを堪能したいんですよ」

なのはとリンが嫌がるような事はしてないと言い張る。

「嘘です！なのさんもリンさんも僕がグツタリするまで離さないんですよ！僕には拷問です！フェレット権を尊重してほしいです！」

「フェレット権って何だよ……」

プロキオンの主張をヴィータはツッコミを入れるが、彼の耳には入っていない。

その主張を聞いたなのはとリンはというと。

「ロツキー君がそんなに嫌がってるなんて……」

「リンは自分の欲望に忠実すぎたです……」

結構効いていた。

（僕ももっと主張しておけばよかったかな……）

ユーノは物怖じせず主張するプロキオンを羨ましく思いながら、自身がフェレットの姿で生活していた時の事を思い出していた。

邪な感情を抱く男性ならば代わってほしいと言っただろうが、ユーノにしてみれば地獄そのものだった。

いくらフェレットとして鳴き叫んでも全然聞いてくれない。

人語を話せば珍生物扱いになるため、話したくても話せない。

元は人間でフェレットに擬態しているだけなので、常識や倫理等は全て『人間』を前提として行動してしまう。

しかし、可愛いもの好きの人（主に女性）はその辺りの事を察してくれない。

とにかく無防備なのだ。

平気で裸になるし、スキンシップを図ってくるしユーノ自身抗議をしても一向に聞き入れてもらえなかった事が多数なので、今のプロキオンの気持ちは痛いほど理解できる。

プロキオンはイメージとはいえ性格は子供でも、性別は『男』なのだ。

若い女性の裸を見て、喜ぶような好色家ではなくむしろ羞恥心が勝るといつてもいいほど初心なのだ。

「ユーノ君」

「ユーノさん」

プロキオンに抗議されて落ち込んでいるのはとリンがこちらを見ていた。

様子から察するに、プロキオンの機嫌を直してほしいとの事だろう。

「まあ僕もフェレット姿のときは散々弄られたからね……」

女の子が落ち込む表情を見るのはあまり好きではないが、プロキオンの心情も理解できるので板挟み状態になっていた。

「ロッキー」

「何ですか？僕怒ってるんですよ。フェレット権が尊重されるまで戦うんです！」

頭上のプロキオンのご機嫌を伺ってみるが、絶賛不機嫌中だった。

「フェレット権ってなに？」

今度はフェイト・T・ハラオウンが訊ねるが、誰も回答してくれなかった。

「ロッキー。二人とも反省してるようだから許してあげたら？」

主にそのように言われると、プロキオンとしては従うかどうかは悩んでしまうところだ。

なのはとリインを見るプロキオン。

反省しているようにも見える。

（女の子はマシヨウだと司書の人が言ってたです。でも……）

自分のせいで二人の少女が落ち込んでいる。

それを冷たく放置できるほど、自分は大人なイマジンではない。

「なのさん。リインさん」

プロキオンが加害者の二人に声をかける。

「なに？ロッキー君」

「何ですか？ロッキーちゃん」

「フェレット権を尊重してくれるならいいですよ」

プロキオンが条件をつける。それを守れるなら許すという事だ。

「わかった。ロッキー君の権利……フェレット権を尊重するよ」

「リインも尊重するです！」

二人の言葉をユーノとプロキオンを聞いている。

「ユノさん。お願いします」

「了解」

ユーノは頭上に乗っかっているプロキオンを両手で掴んで、なのはに差し出した。

なのははプロキオンを受け取り、凝視する。

「あゝ。やっぱり可愛いよお」

「本当ですよ」

なのはとリインはプロキオンを見て、にへらと表情を緩める。

「なのは、リイン。ロッキーとの約束破っちゃ駄目だよ？」

「は〜い」

なのはとリインはプロキオンに嫌われないように、可愛がる事にした。

「フェレット権って何なん？」

八神はやてが訊ねるが、やっぱり誰も答えてはくれなかった。

プロキオンの背に乗っかっているリインはなのはにある事を訊ねていた。

『戦技教導隊』の事である。

「一般イメージでの『教官』は『教育隊』の方になるね。私達『戦技教導隊』の主な仕事は魔導師用の新型装備や戦闘技術をテストしたり、最先端の戦闘技術を作り出したり研究したり、それから訓練部隊の仮想敵として演習の相手。想定される敵の能力や陣形をシミュレーションするからいろんな飛び方や戦い方をするんだよ」

「なのはは一口ジューズを口に含む。
「あとは預った部隊相手に短期集中での技能訓練……。これが一番教官っぽいかな。私はこれが一番好きなんだけどね」
なのはは大まかな説明を終えた。

「要はアレだな。戦時のエースが戦争のないときに就く仕事だ。技術を腐らせず有用に使うためにな」

「うーん。まあそんな感じではあるんですが……」

シグナムの端折った説明になのはは唸りながらも頷く。

「でも、うちの航空教導隊にも色々な年齢や経歴の人がいるんです

けど、みんな飛ぶのが好きなんですよね。一緒に飛ぶ人や帰り着く地上が好きだから自分の技術や力で自分の好きな空と地上を守りたいって。そういう思いは一緒なの」

なのは語りながら笑顔になっていく。誰もがその言葉に耳を傾けていた。

「なのはがずっと憧れていた夢の舞台だもんね……」

グラスを片手に持っているフェイトが付け足す。

「夢はまだまだこれからだけどね！」

なのはは右手を振り上げて、『もっと頑張る』という表れであった。

「勉強になりました！ありがとうございます。なのはさん！」

「どういたしまして」

リンはプロキオンから降りて、はやての元へと戻っていった。

そんななのはをユーノ、フェイト、ヴィータが見ている。

「なのはは本当に嬉しそうだけど、ユーノはやっぱり心配でしょ？」

あの事故の後、私達三人は付つきりだし……」

フェイトがジューズを一口飲んでから、苦笑を浮かべながら訊ねてきた。

「あたしは心配じゃねー」

ヴィータはそっぽを向いて眩きながらチャーハンを一気に口の中に放り込んでいた。

「まあ心配は心配だけど……。なのはが初めて空を飛んだときから何となくは思ってたんだ」

シグナムと話しているなのはを見ながらユーノは言う。

「なのはには青い空がよく似合ってる」

ユーノは本人も無意識なうちに何か眩しい物でも見るような表情をしていた。

プロキオンが指定席であるユーノの左肩に飛び乗る。

ユーノは手にしたグラスをテーブルに置く。

「ユーノ？」

「少しアースラの中を散歩してくるよ。ロッキーは初めてだからね」

「そうなんだ。行ってらっしゃい」

「ありがとう」

ユーノは背を向けてレクリエーションルームを出ようとする。

「良太郎？」

一瞬だがフェイトにはユーノの背中がここにいるはずのない野上良太郎の背中に見えた。

「ん？どうしたの？フェイト」

「え、ううん。何でもないよ」

フェイトは両手をバタバタと振って慌てて誤魔化した。

自動ドアが閉じて、ユーノの姿がなくなるとフェイトは自身が何故そのような事を口に出したのかわからなかった。

「フェイトお、いくら良太郎に会いたいからってユーノの背中を見てソレはねーじゃねーのか？」

ヴィータが呆れながらもフェイトをからかう。

「ち、違うよ！私もわからないんだけど何でかユーノの背中が一瞬良太郎の背中に見えたんだよ」

「？」

言っている側のフェイト自身もわからない事を聞いている側のヴィータがわかるはずがなかった。

アースラの廊下をユーノとプロキオンが歩いていた。

プロキオンは新しい事を知る事が楽しいのかキョロキョロと見回していた。

「ごめんね。プロキオン」

ユーノの謝罪にプロキオンは首を傾げる。

「いいですよ。居辛かったですか？」

「そうだね。覚悟はしてたけど見るのが辛くてね」

ユーノの表情は辛さを耐えているものだった。

決して、幼馴染達の前では見せない表情だ。

「みんな。夢に向かっていているんだなって改めて思い知らされたよ…」

「ユノさん……」

人は誰でも夢を見る権利があるし、叶える権利もある。だがそれは『時間』が存在しているからだ。

そして自分はその『時間』を護るために戦う事を選んだ。同時に夢を見る権利も叶える権利も捨てた。

その事に後悔はない。

そもそも自分にはそんな事を後悔する『権利』もないのだ。

「『今』の僕があるのは『あの人達』のお陰だからね」

ユーノとプロキオンはガラガラの食堂に入る。

「もうすぐですね……」

「うん……」

プロキオンの言いたい事をユーノは理解できるので首を縦に振るだけだった。

レクリエーションルームでは話が盛り上がっていた。

今度はフェイトの番となっていた。

宙に映像写真を出現させていた。

フェイトと共に様々な子供が写っていた。

みな笑顔を浮かべているのが印象的だ。

「執務官の仕事で地上とか違う世界に行った時にね。事件に巻き込まれちゃった人とか、保護が必要な子供とか保護や救助をした後お手紙くれたりすることがあるの。特に子供だと懐いてくれたりして

……」

「フェイトちゃん。子供に好かれるもんね」

フェイトが詳細を説明し、なのはが率直な感想を述べた。

「あー！エリオ、しばらく見ないうちに大きくなったなー」

はやてが映像写真に映っている一人の少年の名前を口に出していた。

「あーこいつもその手の子供かー。エリオ・モンディアル六歳祝い？」

ウィータが映像写真の下に書かれている内容を口に出して読み上げる。

「うん。色々な事情があつてちょっと前から私が保護者つてことになつてるの。法的後見人はうちの義母さん」

「元気で優しいいい子だよ」

笑顔でなのはが付け足した。

「フェイトちゃんが専門のロストロギアの私的利用とか違法研究の捜査とかだと子供が巻き込まれてるケースが多いからなあ」

はやてが解説しながらも映像写真を見る。

後ろでシャマルが「かわい〜」と言つていたりする。

「うん。悲しい事なんだけどね。特に強い魔力や先天技能のある子供は……」

フェイトがどこか悲しげな笑みを浮かべる。

今こうして写つている笑顔になるまではそれなりの経緯があつた。

身体の傷は治す事は出来ても、心の傷は簡単には消えない。

こうして笑顔を向けている子供達とて完全にその傷が消えたわけではない。

心の傷を癒すには荒療治が長い目で見るかどちらかしかないだろう。自分は出生の事実を告げられたとき、荒療治で立ち直った側だ。でも、そこには常に見守つてくれた人がいた。

（私がこうして子供達と関わつたりお世話を焼いたりしてるのも良太郎が昔、私にしてくれた事から始つているのかもね）

振り返つてみると、そのように考える事も出来ていたりする。

「だからお前はそれを救つて回つているんだろう」

「そーだよ」

シグナムとアルフ（幼児）が背中を押すように言う。

「子供が自由に未来^{ユキ}を見られない世界は大人も寂しいですからね」
フェイトは穏やかだが、強い覚悟を持った瞳で告げた。

「そついう意味ではお前は執務官になれてよかったのだろうな。試験に二度落ちた時はもう駄目かと思つたぞ。野上がいない間に合格

できてよかったな」

シグナムがフェイトをからかう。

「あつっ！シグナム。貴女はそうやってことあることに……。それには良太郎に言ったんです。絶対に諦めないってだから良太郎がいようがいまいが私が恥ずかしいと思うのは諦めた時だけです。それにシグナムこそどうなんですか？私の事をからかっていますけど、良太郎と会った時何も変わってないではその……」

フェイトが負けじと言い返す。

「……それもそうだな」

シグナムは自覚したようだ。

あれから六年。自分は何一つ変わっていない事に。

「その点、はやてさんはすごいわよね」

「上級キャリア試験一発合格！」

リンデイ・ハラオウンが切り出し、エイミー・リミエツタが締めた。

「私はそのタイミングとか色々と運がよかっただけですから……。
稀少技能持ちの特例措置もありましたし……」

「またまたあ」

エイミーがはやてに「ご謙遜を」というような口振りでからかう。

「凄い勉強してましたもんね」

「あの時から『試験』と聞くと心配で心配で……」

なのははその頃の事を思い出し、シャマルはまるで受験生を持った母親のような口振りだった。

ちなみにフェイトとシグナムはどんよりと落ち込んでいたが、誰も「フォロー」には入らなかった。

「稀少技能保有者とかスタンドアロンで優秀な魔導師は結局便利アイテム扱いやからなあ」

はやては疲れたのか近くにあった椅子に腰掛ける。

「適材が適所に配置されるとは限らへん」

なかば愚痴に近い事をこぼしていた。

「はやてとヴォルケンリッターの悩みどころだなあ」

アルフがマンガ肉を食べながらファイラ（獣）にも別のマンガ肉を食べさせていた。

「でも、はやてちゃんの目標通り部隊指揮官になれば……」

「そのための研修も受けてるじゃない」

「準備と計画はしてるんやけどな。まだ当分は特別捜査官として色んな部署を渡り鳥や」

なのはがはやての目標を語り、フェイトがはやての近況を言う。

はやては現実を語りながら、ラインに皿に乗っている料理を食べさせていた。

「はやてちゃん。色んな場所に呼ばれちゃうから、お友達とかできづらいのがねえ」

シヤマルは、はやての人間関係に『友達』と呼べる人種が少ない事を懸念していた。

『渡り鳥』と自称するだけあって、はやて達は『巢』と呼べる腰を落ち着けるようなところがない。

メリットとして、様々な人脈を獲得する事は出来る。

デメリットとしてはその付き合いが『広く浅く』になってしまったため信頼関係を築き上げるのにかなりの時間を要する事になる。

「いや友達は別に。もう十分に恵まれてるし」

シヤマルの懸念をはやては्यानわりと流す。

「でも経験や経歴を作ったり人脈作りができるのはいいことですよね」

「まあ確かに」

フェイトの台詞に焼き鳥を食べているシグナムは同意する。

「陸士部隊は海や空と違って部隊ごとの縄張り意識みたいなもんが強いから、その辺を肌で感じてみるとええってクロノ君も教えてくれたしな」

はやてはラインに料理を食べさせる。

「まあ部隊指揮官はなったらなっただで大変そーやし、どこかで腰据えて落ち着けたらそれはそれで……ゆー感じやね」

はやてはおぼろげながらも自身の未来を語っていた。

「落ち着ける場所。見つかるといいよね」

「私も二人に追いつかなあ」

なのはが希望先が叶う事を願い、はやても感謝を込めて笑顔で返した。

「ユーノ君はどう？つてあれユーノ君は……」

なのはが今度はユーノの近況を聞こうと思っていたのだが、そこには当の人物はいなかった。

ユーノとプロキオンは食堂ではなく、個室を覗いていた。

「ここがアースラでの個室だよ。ほとんど寝るだけ部屋だけだね」

「寝るだけ部屋？」

聞きなれない言葉にプロキオンは首を傾げる。

「寝る以外にはここに帰る事がないから寝るだけ部屋って僕は呼んでる」

ユーノが解説すると、プロキオンは納得する。

「次は転送ポートへと行こうか」

「はい！」

特に急がない足取りでユーノとプロキオンは艦内見学を続行していた。

なのははレクリエーションルームを出て、単身ユーノとプロキオンを捜していた。

アースラは広いとっても迷路ではない。

それに勝手知ったる何とやらであるため、どこに何があるかは大まかに把握している。

（ユーノ君……）

なのはは言い知れない不安のようなものがあつた。

この不安は割と前から時折あつた。

（いつからだろ……。ユーノ君が遠い人のように感じるようになった）

たのは……)

今まではいて当たり前前の存在だった。

自分が困った時、いつでも相談に乗ってくれた。

『無限書庫』は自分にとって心休まる場だった。

なのはがユーノの事を気になりだしたのは、自身が重傷に遭った時だ。

あの時、ユーノは自身の責任のようにして責めていた。

「僕が魔法の世界に巻き込みさえしなければ、こんな目に遭わずにすんだのに」と言っつて。

まるで『償い』のようにして、彼は自分のリハビリに付き合ってくれた。

自身が完治してからもユーノの『自分を責める』という姿勢は変わらなかった。

その度に「気にしていない。自分を責めなくていい」というような事を、なのはは言う。

ユーノはその度に笑みを浮かべて、お茶を濁すような言葉を吐く。そして結果は変わらない。

(ユーノ君。やっぱり今でも気にしてるのかな……。アレは私の責任なのに……)

自分が重傷に遭った事に、ユーノに責任はないといえない。

ユーノの周りに『変化』を感じるようになったのも、完治してからだろう。

食堂に入るが、誰もいない。

それは目に見える『変化』ではなかったので、すぐにはわからなかった。

ユーノが『変わった』と感じたのは今から一年前のあの二つの出来事だろう。

一つは五年に一度行われる時空管理局主催の魔法戦競技会『MAGILLING VALETUDO』《マギリングヴァーリトワード》に出場していた事である。

参加資格は年齢制限なしではあるが、魔導師ランクに制限があつて下は『ランクなし』からで上はA+までとなつている。^{エーブラス}

ユーノの魔導師ランクはAだったので、参加資格はある。

ユーノが参加する事になつたと聞いたとき、なのはは驚いた。

その手の事に積極的にならないユーノが何故？と真つ先に思つたくらいだ。

結果としてはユーノが優勝した。

幼馴染とその仲間達も観戦しており、誰もが祝福の声やら宴会やらを催そうと企んでいた。

なのはも労いの言葉をかけようと思つた。

その時、なのはは見た。

優勝者の顔には何の感情も入っていないことを。

まるで優勝した事に、感動も安堵もない、どうでもいいというような投げやりな表情をしていた。

その時、なのははユーノが『変わった』と確信した。

（その後からだっけ。ユーノ君が行方不明になって、戻ってきた時にはロツキー君がいたんだよね……）

もう一つはユーノが発掘の仕事に携わつた際に行方不明になつた事だろう。

二ヶ月近く音信不通になつており、もしくは死亡したのではないかとまで囁かれた事もあつた。

なのはは仕事に取り組みながら、ユーノが無事に帰ってくることを願っていた。

ユーノが無事に帰還してすぐだろうか。彼が『変わった』と思えたのは。

以前のような暗さがなくなつたのはいいが、何かを決意したように思えた。

何を決意したかはわからないが、そして現在に至るといふわけだ。

「あ！ユーノ君！ロツキー君！」

なのはが声を上げると、艦内見学をしていたユーノとプロキオンが

手を振ってくれた。

なのはと合流したユーノとプロキオンは二人と一匹のパーティー編成で歩いていった。

「そうなんだ。ロッキー君にアースラの中を見せてあげてたんだあ」
なのははユーノからレクリエーションルームから抜けた理由を聞いて納得していた。

もちろん、それは建前である。

本当は居辛かったなんて事は口が避けても言えない。

「はい！いつも本棚ばかりだから凄く新鮮で面白かったです！」
プロキオンは無邪気にそのように言う。

建前が始まりであっても物事を純粹に楽しめるのがプロキオンの長所である。

「よかったねロッキー君。でもそれなら私も一緒に行きたかったなあ」

なのはは不満をこぼしながらちらりとユーノを睨む。

「でも、なのは。夢中で話してたじゃない？話の腰を折る気にはなれなかったからね」

「む〜」

ユーノの最もな言い分なのはは頬を膨らませて唸って抗議する。
そんな仕種を見て、ユーノは笑みを浮かべる。

「あ、そうそう。ユーノ君は最近どうなの？」

「どうって？仕事の事？プライベート？」

「うーん。お仕事もだけどプライベートも知りたいかな」

「仕事は暇か忙しいかと言えば忙しいね。クロイノの資料請求は相変わらずスタッフ泣かせだし、プライベートっていつでも休みの日は本を読んだり、学会に提出する論文書いたり、なのはと出かけたりとするくらいかな」

なのはは聞き終わると、ユーノの両肩を掴んでいた。

「ユーノ君！」

「は、はい」

思わぬ迫力に慄慄に返してしまふ。

「私が言うのも変かもしれないけど、もっと遊んだ方がいいと思うよ！ユーノ君、このまんまじゃ寂しいお爺さんになっちゃうよ！？」

なのはは勝手に未来を予想しているが、何故か疑問になっていた。

「なのは。僕の未来を想像するのはいいけど、何で疑問形になっちゃうの？」

「だってえ、ユーノ君、本当に『お爺さん』になれるのかどうか心配で……」

「僕は桃子さんや土郎さんじゃないから『お爺さん』になるよ」

「本当？」

なのはがずいど顔を寄せる。

その目には『疑い』が籠っていた。

「私達がお婆さんになっても、ユーノ君はお爺さんになりそうにないような気がするんだよね……」

「根拠は？」

「うーん。私の勘じゃ信用できない？」

「魔法がらみでない、なのはの勘はどうもね」

思いつきり疑っていた。

「ひどいよ！ユーノ君」

なのはは両手を高くかざして『怒ってます』というような仕種を取るが、ユーノにはそれが微笑ましく思えてしまふ。

そんなユーノを見たなのはも笑顔になっている。

（最初はこの笑顔を守りたいから強くなりたいてって思ってたんだっけ……）

今は違う。

今は『なのはだけ』の為に戦っているわけではないとハッキリと言える。

今は『時の運行』を護る為に戦っている。それがその世界に住んでいる人々を護る事になると信じてた。

「ユーノ君？」

「ん、何？なのは」

「どうしたの？ジーンと私見てたけど顔に何かついてる？」

「いや、何でもないよ」

ユーノは腹の内を探られるのを避ける為に誤魔化した。

「お休みできたらさ。また海鳴においでよ。翠屋のケーキご馳走するよ」

なのはは、ユーノに休暇が出来たら海鳴に来るように促す。

「そうだね。久しぶりに食べたくなってきたよ」

「僕も食べたいですう」

「うん。ロッキー君も来たらご馳走するからね」

プロキオンが純粹に喜ぶ姿を見て、なのはとユーノも笑みを浮かべていた。

二人と一匹はその後も談笑しながら、レクリエーションルームへと足を進めた。

*

クロノ・ハラオウンとヴェロツサ・アコースは時空管理局本局の廊下を歩いていった。

「クロノ君。君から見てどうだい？君が見守ってきたエース達は？」

「……なのはやはやて達の事か？今更僕が語る必要はないさ。それぞれ優秀だよ」

ヴェロツサの質問に対して、クロノは「何を今更」というような表情をしていた。

「しかし三人ともまるで申し合わせたように技能と能力がバラけるよね」

ヴェロツサが件の三人に関して口を開く。

「稀少技能と固有戦力持って支援特化型で指揮能力を持ち、仮面ライダーゼロノスとファーストコンタクトをした経歴がある八神はや

「特別捜査官」

ちなみに武装隊では一尉扱いである。

「法務と事件捜査担当。多様な魔法と戦闘力で単身でも動き、仮面ライダー電王と出会い最初に戦闘した経験を持つフェイト・T・ハラオウン執務官」

はやての次にフェイトのことを語るヴェロツサ。

フェイトが電王と戦闘した事は今のフェイトにしてみれば閉まっておきたい『若気の至り』だったりする。

「部隊メンバーを鍛え育てる事が出来て、こと戦闘となれば単身でも集団戦闘でもあらゆる状況を打破してみせ、人類に対して友好的なイマジンと最初に接した『勝利の鍵』高町なのは二等空尉」
最後になのはの事を語って終えた。

「三人揃えば世界の二つや二つ軽々と救ってくれてみせそうだなってさ。かの三提督の現役時代みたいに」

「夢物語ではあるがな。それに今、管理局は次元犯罪者だけを相手にしているわけにはいかないからね。本当に夢物語だよ」

「イマジンかい？」

クロノが途端に真剣な表情になり、ヴェロツサも釣られて同じ表情になる。

「ああ。奴等は次元犯罪者よりずっと性質が悪い。個人の戦闘能力が魔導師でいうAAAだからね」

それだけでまともに対処できる存在が限られてくるというものだ。

「でも、そんな夢物語を現実にくれそうな存在があるのも確かだ」

「仮面ライダーかい？」

ヴェロツサの一言にクロノは首を縦に振る。

「彼女達と彼等が手を取り合えばそれこそ本当に夢物語が実現できそうだけどね」

クロノが締めくくった。

「クロノ君はやっぱり優しいお兄ちゃんだねえ」

「なんだそれは……」

ヴェロツサのからかいにクロノは苦笑するしかなかった。

（仮面ライダー……青いゼロノスもその部類に入るみたいだし、少し調べてみようかな）

ヴェロツサはクロノと共に歩きながらもAゼロノスの単独調査に取り掛かることを決意した。

こうして同窓会的任務は幕を閉じた。

第五話 「夢に向かう者。夢を護る者」(後書き)

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL A t Sです!!」

はやての研修先近くの温泉へと旅行に向うのは達。

空港で爆発が起こる。

少女を助けたのはだが、その前にイマジンが出現する。

そのイマジンを一機の青い装甲車が撥ね飛ばした。

第六話 「G・W。二度目の出会い」

第六話 「G・W。二度目の出会い」(前書き)

いつも読んでくれてる皆様。

お気に入りお呼びユーザー登録してくれている皆様。

感想を書いてくれてる皆様。

まずは作者の独断と偏見によるキャラクターから。

タンブラー・バットモービル(バットマンビギンズ、ダークナイト)

キャラクターではないですけど、すごく魅力的な車なのでここで紹介します。

外見は今までのバットモービルとは大幅に違いますが、その走りっぷりには完全に虜になりましたね。

初心者でも玄人でもプリ ス以上に信頼できる車かもしれませんね。

第六話 「G・W。二度目の出会い」

次元航行艦アースラのレクリエーションルームではというと、これから訪れる黄金週間……ゴールデンウィークの予定で盛り上がっていた。

ミッドチルダにもゴールデンウィークはあり、彼女達は管理局員兼学生であるため楽しむ権利があるといえはある。

「あ、そや！二人ともゴールデンウィークの連休！」

その話題を切り出したのは八神はやてだった。

「はやてちゃんの研修先の近くだよな？」

「お休みの申請、出してあるよ」

高町なのはが目的地の確認をし、フェイト・T・ハラオウンがそのための手筈も整えていた。

「ホテルはもう取ってあるからな。アリサちゃんやすずかちゃんも来れたらよかったんやけど……」

はやては宿泊先の手続きを完了しており、アリサ・バニングスや月村すずかが来れない事には残念がっていた。

「ユーノ君もー」

なのはがユーノ・スクライアも辞退している事に不満をこぼしていた。

「まあ女の子達でつてことで……」

「ごめんなさい。なのさん」

ユーノが当たり障りのない言い訳をしてプロキオン（フェレット）が深々と頭を下げた。

「ごゆっくりどうぞ」

「私達も緊急任務がなければ途中からでも合流します」

「あたしは途中参加ー」

ヴォルケンリッターやアルフ（幼児）も正規の参加というかたちではないが、余裕があれば参加すると表明した。

その話題で賑やかになっていき、リンディ・ハラウンやエイミィ・リミアッタはその後景を微笑ましく見ていた。

*

四月二十九日。

ゴールデンウィークに突入しており、ミッドチルダでごく一般の家庭を過ごしている面々は思いつきり楽しもうとしている。

『無限書庫』の司書長室ではユーノとプロキオンが旅支度をしていた。

「ユノさん。食糧とテントは全部Aライナーに積めました」

地下格納庫で荷物を積み込んだプロキオン（イマジン）が司書長室へと戻ってきた。

「ありがとう」

ユーノは自身が『無限書庫』を離れている間の事を資料にしていた。「あたしも途中から参加する事になってるけどさ、アンタ達本当に行かないのかい？」

アルフが最後の確認として、ユーノとプロキオンに訊ねる。

彼女は今日、ユーノとプロキオンが何処に行くかは知っている。

「うん。行くつもりはないよ」

「ごめんなさい。アルフさん」

ユーノは即答し、プロキオンは頭を下げる。

「コレ。僕が留守中にトラブルが起こったときの対策を資料にしたからみんなに渡しておいて」

ユーノが作成した資料を紙面にしてアルフに渡す。

一部しかないところを見ると、「後で刷っというて」という意味合いがある。

「りょーかい」

アルフが受け取り、司書長室にあるコピー機で印刷する。

ガガガーツと音を鳴らしながら、コピー機が紙を刷っていく。

「それじゃ行ってくるよ」

「行ってきます。アルフさん」

プロキオンは全身を輝かせてフェレットモードになってユーノの左肩に乗った。

ユーノは本を一冊、本棚に入れる。

それが起動キーとなっており本棚が左にスライドして地下の格納庫へと通じる通路が出現する。

ユーノとプロキオンは通路を通り、地下格納庫へと一直線に向うエレベーターに乗った。

地下格納庫には三両編成の『時の列車』であるAライナーが発車準備を完了していた。

ユーノとプロキオンは一両目のAライナー・ミサイルに乗り込んでコントロール室となっているバイク――ANOTHERホーン――以後：Aホーン――に跨って、グリップを回してアクセルを噴かせてAライナーを発車させた。

Aライナーの車輪が回り始め、前面には『時の空間』へと通じる空間が生じており、線路を敷設させながら一直線に走り出した。

*

ミッドチルダの北部にある臨海第8空港。

空港が人で賑わっていないとその空港が財政難で逼迫しているのではないかと思われる。

ただし、賑わっていたらいたで問題が絶たないというのも事実だ。

現にその問題が起きていた。

「はい。お待たせしました。ご用件はなんでしょう？」

空港の受付嬢が一つの案件を片付けた後、待たせていた一人の少女に顔を向けて対応した。

「あの、迷子の呼び出しをお願いしたいんです」

少女は遠慮がちながらも目的を告げる。

「はい。ではまずお客様のお名前をお願いします。それから出発された場所も……」

受付嬢は懇篤な態度で応じ始める。

「はいっ。ミッド西部エルセアから来ました。ギンガ・ナカジマです」

少女……ギンガは自己紹介を終えてから、語り始める。

「迷子になったのは私の妹で……」

一人の少女が空港内を元気よく走っていた。

あるものを見つける為に迷いなく走っていた。

「んー。お姉ちゃん。ここにもいない……」

少女はキョロキョロと見回して、あるもの……姉の姿を捜している。

「じゃあ今度はあっち！ 搜索開始ー」

少女は特に気落ちした様子もなく、また走り出した。

「多分、エントランスの辺りではぐれたと思うんですけど……」

ギンガは受付嬢にどの辺りではぐれたかを思い出しながら告げていた。

受付嬢は態度を崩さずに対応している。

「名前はスバル・ナカジマ。年齢は十一歳です」

ギンガは迷子の妹の名前と年齢を告げて、無事にもう一度再会できる事を祈るしかなかった。

*

ユーノとプロキオン（イマジン）はある次元世界にいた。

人一人おらず、周りは広い大地しかなく、Aライナーは『時の空間』には隠さずに堂々と置いていた。

一人と一体の前には中型の慰霊碑と墓が二つ並んでいた。

風がふぶいており、土煙が舞っていた。

その中で一人と一体はキャンプ用のテントを張っていた。

三角型ではなく、ドーム型である。

現在はボタン一つで完成するテントもあるのだが、ユーノはこのように手間隙かけて張るタイプを好んでいた。

これはスクライアの部族にいた際の名残でもある。

テントを張る際に使用した道具を片付けているのはプロキオンだ。

ユーノとプロキオンのコンビネーションは戦時だけでなく、平時でも抜群だという事だ。

「よしっ！完成」

「やりましたね！ユノさん！」

ユーノはテントを完成させると、Aライナーに向っていく。

積んでいた荷物を下ろすためだ。

プロキオンも倣って、Aライナーに寄る。

車内に入ったユーノが荷物を両手で担ぎ、プロキオンがそれを受け取ってテントの中へと持っていく。

何日分かの食糧だ。

といっても、高級な物はない。

鍋に適当に切った食材を放り込んで、煮込んで食べるというのがこの場での最高級な食事になるだろう。

そのための水も用意している。

粗方準備を終えたユーノとプロキオンは慰霊碑と墓の一つを見ている。

「もう一年になるんですね……」

「そうだね……」

プロキオンの言葉にユーノは答えるが、表情は決して明るくなかった。

Aライナーが『警報』を表すサイレンを鳴らすのはそれから五分後のことだったりする。

*

なのはとフェイトは、はやての研修先の温泉地へと向う為にミッドチルダ北部にいた。

「ふええ。ミッドの地上も首都と北部では結構違うねえ」

なのははミッドチルダの地理に詳しいわけではないので、純粹に地域の違いを楽しんでいた。

「こつちの方は自然が多いから観光スポットも多いよ」

ミッドチルダに関してそれなりに土地勘があるフェイトは照りつける日光の光を心地よく感じながら、なのはに説明していた。

（私としては街よりもこつちの方が多い方が好きかな……）
街の雰囲気嫌いではないが、どちらかというと自然に囲まれてのんびり過ごすという方が好きだった。

自然と一体になった心地よさのようなモノを感じれるからだ。

「フェイトちゃん。はやてちゃんと合流するのって何時からだっけ？」

なのはが合流時間を訊ねてきたので、フェイトは上着のポケットに入っているハンターケース型の懐中時計を取り出してパカッと上蓋を開く。

「今一時半だからあと一時間後、かな」

時刻を見てからフェイトは上蓋を閉じて、ポケットの中にしまいこもうとする。

「その懐中時計って良太郎さんがくれた物なんだよね。壊れたりしないの？」

六年も使っているのだ。多少のガタがきてもおかしくはないので、なのはの疑問はごく自然のものだ。

「あ、この時計ね。クォーツ式じゃなくて機械式だから、電池切れで修理に出す事はないんだ。修理に出すとしたら、竜頭を巻いても駄目な時か中のレンズが割れたとかぐらいかな」

「クォーツ式？機械式？」

なのはには聞き慣れない言葉だった。

懐中時計には竜頭をぜんまいで定期的に巻かなければならない機械式と、ボタン電池により作動するクォーツ式がある。

フェイトが野上良太郎に貰った懐中時計は機械式であり、定期的に竜頭を巻かなければならないタイプの物だ。

正確さや手間隙という点ではクォーツ式に軍配が上がるが、機械式の特徴である『カチコチ音』を好んで使う物も多いといわれている。フェイトもこの『カチコチ音』は好きだった。

いかにも『時間を刻んでいる』『事をリアルに体感しているような気分が味わえるからだ。』

懐中時計の蓋の内側には『A thought connects the time.』と刻まれている。

意味は『想いは時を繋げる』である。

フェイトはこの言葉を胸に一つの事を思い続けている。

野上良太郎と逢える日を。

「フェイトちゃん」

「?、どうしたの?なのは」

先程とは違ってかわって真剣な表情をしているなのはを見て、フェイトは一瞬だが目を丸くしてすぐに平静な表情へと戻る。

「フェイトちゃんは寂しくないの?その……もう六年だよ。良太郎さんが別世界（じゅうせかい）に来なくなつて……」

なのはは知っている。

フェイトが時折、寂しそうに懐中時計を見ている事を。

テレビなどで電車が映っていると「ふう」と溜め息をついている事を。

「最初の内は寂しかったよ。もしかしたら二度と逢えないんじゃないかって思った事もあるよ」

フェイトの言葉を聞き、なのはは耳を疑った。

自分が知る限り、フェイトは人前でそのような事を言った事がない。「こんな思いをするくらいなら最初から逢わない方がよかつたつてね……」

寂しい思いや苦しい思いをするくらいなら最初から逢わない方がいいというのも、ある意味では自然なものだろう。

「でもね。良太郎と出会えなかつた事を考えた方がもつと寂しいつて事に気付いたんだ……」

野上良太郎と出会えたからこそ、フェイトは『恋』を知った。

それは時には辛く、寂しくなり、胸が張り裂けそうなものになる。

「そしたらね。出会えた事で生じる寂しさは辛い時もあるけど、何とでもなるつて思えるようになったんだ。この懐中時計の言葉どおり私と良太郎の時は繋がつてるつて思えば、ね」

そう言い切るフェイトの表情に迷いはなかつた。

今の台詞を発するまでに一人で悩んだりしたのだろう。

「フェイトちゃん……」

なのははフェイトがすごく大人に見えた。

今の自分では到底辿り着けない場所に居るように思えた。

「どうしたの？そんな事訊いてくるなんて珍しいね」

「え？そ、そうかな……」

この手の事なのはは訊いてくるのは珍しいので、フェイトは訝しげな表情になる。

「もしかしてあの打ち上げの時、ユーノと何かあつた？」

「ふえ？ど、どうしてそう思うの？フェイトちゃん」

「なのはがこの手の事を聞いてくるとしたらユーノと何かあつたつて大体決まつてるからね」

フェイトの一言に、なのはの心の内を見抜かれたかのように目を丸くしていた。

「私の行動つてそんなに単純なのかな……」

なのはは自分のコレまでの行動を振り返ることにした。

管理局武装隊陸士104部隊。

はやてとリインは外出の準備をしていた。
内勤だったためか、上着を脱いでいたはやては羽織りながら外に向
っていた。

「はやてちゃん。なのはさん達は空港からホテルに向っているそう
です」

宙を浮いてるリインがはやてに報告する。

「はあい。じゃ、ちよつと外回つてそのまま休暇に入りまーす」
はやては報告を受けてから、近くにいる局員に自身のこれからの事
を簡潔に告げた。

「はいよ八神一尉。非常回線は開けといてくださいよー」
局員はそのように外出兼休暇に入るはやてに釘を刺しておいた。

*

臨海第8空港の輸送物仕分け室。

一つの光球がふわふわと宙に浮かんでおり、やがて輝きが増して『
球』から『人型』へと形を変えていく。

そこに出現したのはモズ型のイマジジン・・・シュライクイマジジンだ。
「好きだねえ。本当に」

彼ははぐれイマジジンで職業は泥棒という変り種であり、同業者であ
る数名の人間と行動している。

今回の目的は輸送物の中から金になりそうなものを盗んでくる事だ。
もちろん、その際に障害となるものは全て排除してもいいという才
マケ付きだ。

この時点でただの泥棒集団ではないという事は一目瞭然である。

木箱を素手で引っぺがしながら中身を物色する。

宝石に金塊に、食物などもある。

金塊一つを手にして、爪でギーっとなぞる。

本物の金なら傷がつくだけだが、爪には金が付着しており銀色の素

体が見えているところからしてこの金塊はメツキだったらしい。

宝石を手にして凝視するが、すぐに箱の中に捨てた。

捨てられた宝石はパキンという音を立てて碎け散る。

「イミテーションか……。ロクな物がねえな」

シュライクイマジンは呆れながらも、物色を続ける。

「ん？」

一つの未開封の木箱が目に入る。

『危険物扱い』と貼られていた。

「

シュライクイマジンにとってはコレが今回の目当ての物と決めた。

偽物の金塊と宝石に贋作の絵画、オマケに大して金になりそうになり食物と辟易していたところだ。

目的物を遮る木箱を持ち上げて適当に放り捨てる。

「よし！ゲットオ」

両手で持ち上げた瞬間。シュライクイマジンの全身に悪寒が走った。泥棒なんてやっている、そういう『危機感』というものが発達してしまふ。

それは人間でもイマジンでも関係ないといったところだろう。

「コレ。もしかして危険物なんて生易しいモノじゃねえんじや……」

シュライクイマジンは両手で抱えている品をどうしようかと悩む。

このまま持って帰ると選択した場合、時限爆弾を抱えて行動する事と同じである。最も爆弾如きでイマジンが木っ端微塵になるはずがないが。

持って帰らないと選択した場合、仲間内にコケにされるのは安易に想像できた。

（いっそ持って帰って吹っ飛ばしてやるるか……）

シュライクイマジンは中身を爆弾と判断しているのか、今からアジトに持って帰って仲間を木っ端微塵にしてやるるかと考えている。

『仲間』といっても利益関係で成り立っているものだ。『情』や『絆』のようなものは欠片ほどもない。

利益関係といったのは利益をもたらしてくれている間は『仲間』であり、一度でも害をもたらすのならば躊躇いなく排除にかかるからだ。

木箱からキュイイイインというまるで何かが活発に動くような音が聞こえ始める。

「やべ……」

そう言うってから二秒後にその木箱は爆ぜた。

*

Aライナーは目的地である臨海第8空港に向う為に『時の空間』を経由して、ミッドチルダに向っていた。

目的はイマジンの討伐である。

「コレって相当マズイですよ！？ユノさん！」

プロキオン（イマジン）はモニターに映し出されている臨海第8空港を見ながら、狼狽していた。

コーノはAライナー・マガジン（以後：マガジン）に足を運んで、ある物の点検をしていた。

「どうしたの？プロキオン」

「いいからコレ見てください！」

プロキオンがコーノの手を取って、モニターに映る臨海第8空港を見せた。

轟々と何もかもを焼き尽くす紅蓮の炎が我が物顔で猛っていた。

いわゆる『大災害』という言葉が相応しい状態になっていた。

「臨海第8空港……。確かなのは達が休暇に向う温泉地に使う空港だ……」

「オマケにイマジンまでいますよ！なのさん達が救助とかしてたら妨害するんじゃない……」

プロキオンがもしものことを想像する。

コーノが腕を組んで、思索する。

イメージが何の目的で空港に出現したかはわからないのでありえる可能性を浮かべていく。

(VIPの暗殺?あの空港で今日訪れる予定はなかったはずだし……。輸送物の強奪が一番ありえるセンだけど、何を盗む……)

ユーノは持参した携帯端末を起動させて臨海第8空港のデータベースに侵入する事を試みる。

「まだ生きてくれたらいいんだけど……」

ユーノはキーボードをカタカタカタと叩きながら、調べていく。

「よかった。まだデータは生きてる」

ユーノは安堵の息を漏らしてからすぐに『輸送物仕分け室リスト』を凝視する。

「宝石。金塊。絵画に食物、あとは正体不明の危険物扱いか……。イメージが強盗目的ならば金になりそうなものを狙うはずだから、食物はバツになる……」

「でも残った三つも胡散臭そうですね」

プロキオンはユーノと共に仕事柄、遺跡物の鑑定に立ち会う事があるのでリストに載っている物をそのまま鵜呑みにして信じたりはしない。

「金塊と宝石が偽物で絵画が贋作と判別できるイメージなら持って帰りそうなものは一つしかないね」

ユーノとプロキオンの目に留まったのは『正体不明の危険物扱い』だ。

「コレを火元と仮定すると、中身は爆薬かロストログア……」

そう告げると、ユーノは携帯端末を停止させた。

「プロキオン。速度を上げて！ミッドチルダに入り次第すぐに出動するから！」

「はい！」

ユーノの表情は『戦士』そのものになっていた。

*

臨海第8空港は『火の海』という表現が相応しい状態になっており、『阿鼻叫喚の地獄絵図』という表現に移行しようとしていた。

はやてはなのはやフェイトに現在目の前で起こっている事を念話で告げてから、リインと共に現場にいた。

管理局御用達の中継車の屋根の上に乗っかって無数のモニターを展開させて、的確な指示を送っていた。

火の動きを見て、今後どのような動きをして被害を出そうとしているのかどのようにすれば的確かつ迅速に救命活動が出来るかを思案する。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

私服姿ではなく、バリアジャケット姿なのはとフェイトがはやての前に降りた。

全力で飛行して現場に来てくれたのだ。

「二人ともありがとうな。折角の休暇もペアになってもうたな」

はやてが苦笑いを浮かべながら、張り詰めた場の空気を変えるためおどける。

なのはもフェイトもはやての意図が理解できるので、非難したりしない。

「しょうがないよ。でも早く何とかしないとね」

「うん。この状況を放っておいて休暇を楽しむなんてできないしね……」

なのはとフェイトもおどけた事を言いながらも、真剣な表情で現場を睨んでいた。

Aライナーが『時の空間』からミッドチルダの夜空へと抜け出ていた。

線路を敷設・撤去しながらAライナーは滑空の体勢で線路と道路が平行になるように位置づける。

Aライナーは速度を落とさずに現状を維持しながら走っていた。ユーノとプロキオンはマガジンへと移動しており、そこに格納されているT・REXの頭部をモデルにした青い重装甲車……レックスランダーに搭乗していた。

『レックスランダー。発車まであと二十秒』
レックスランダーに組み込まれているAIが告げる。

ユーノはゼロノスベルトを巻きつけた状態であり、あとはチェンジレバーを右にスライドしてゼロノスカードをアプセットすれば完了だ。

隣座席にはプロキオンが座っている。

「き、緊張しますね……」

「レックスランダーを実際に走らせるのは初めてだからね」

ユーノの言うように、路上で走らせるのは初めてだ。その代わりに『時の空間』や地下格納庫では何度も走らせている。

「どうして現場までAライナーでいかないんですか？」

「ただでさえ、ピリピリしてる中でこんな目立つものが空から来たら余計に神経質になっちゃうよ。ただでさえ僕達は管理局にとっては『敵』でも『味方』でもない扱いだからね」

ユーノの言うとおり、救急現場にいる者たちの殆どが通常とは比べものにならないくらいに神経質になっている。

そんな中、管理局にとって最もイリーガルな存在が堂々と現れるのだ。

神経逆撫でもほどがあるだろう。

同時にイマジンの存在も臭わせることになる。

その事が原因で救命活動に支障をきたす事になるとも否定できなくはない。

「とはいっても、レックスランダーでも十分に目立つけどね」

ユーノは苦笑しながら言う。

『レックスランダー。発車まであと十秒』

AIがカウントダウンを開始し始める。

チェンジレバーを右にスライドさせる。

バイオリンの音色をしたミュージックフォーンが流れ出す。

「変身！」

ユーノはゼロノスカードをクロスディスクにアップセットする。

『ベテルギウスフォーム』

オーラスキンに覆われ、青いオーラアーマーが装着される。頭部の銀色のデンレールを青いネドケラトプスの頭部が走り、定位置になると電仮面になる。

直後に両肩、両下腕、両ふくらはぎに二センチ程の突起が出現する。Aゼロノスに変身を終える。

『レックスランダー発車します。後続車は今から三十メートル後方で時速六十キロを保ったまま走行中。前方車は五十メートルで時速六十五キロで走行中。快適な運転を』

マガジンの口扉が開いて、円滑に地面に走らせる為に滑り台が出現する。

レックスランダーは自動操縦で全タイヤを回転させてバツクする。ギャギャッバツクしてからドオンと音を立てて道路に地をつける。レックスランダー全体が弾む。

グアングアンと揺れるが、中で運転しているAゼロノスとプロキオンにはそのショックはさほど響いてこない。

「行くよ！」

「はい！」

Aゼロノスがアクセルとなるレバーを前に倒す。

ギューイイインという音を立てて、レックスランダーは道路を走り出した。

Aライナーは役目を終えると、滑り台を収納してから口扉を閉じて空に出現している空間に向かって線路を敷設しながら走り出した。

「203、405。東側に展開してください！魔導師陣で防壁張って燃料タンクの防御を！」

はやてはなのは、フェイト以外にも駆けつけた災害担当局員、陸士部隊、航空部隊にも指示を送っていた。

「はやてちゃん。駄目ですう！まるつきり人手が足りないですよ！」

経験の浅いリインはかなり追い詰められているのか弱音を吐く。

「そやけど首都からの航空支援が来るまで持ちこたえるしかないんだよ。がんばろ！」

はやては平静を保ちながら、リインを励ます。

「はい！」

励まされたリインも、はやての期待に応じようとしていた。

はやては一向に改善される様子のない現場を睨んでいた。

その上空を金色の光が駆けており、それは火災現場へと向っていた。

『航空魔導師本局02。応答願います』

本局からの通信が金色の光・・・フェイトの耳に入った。

「はい。本局02。テストロッサ・ハラウンです」

フェイトが応じた。

『8番ゲート付近に要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないんです。お願いできますか？』

切羽詰った声色で現状の説明と要望を同時にする。

「8番ゲート。バルディッシュ！」

フェイトは右手に握られている相棒・・・バルディッシュ・アサルトに視線を向ける。

『ルート検索終了。二分以内に到着します』

必要事項に簡潔に告げた。

「すぐ向います」

そう言うと同時に、フェイトは速度を上げた。

ブオンという音速の壁を破りそんな音を鳴らせて。

はやては宙に浮かんでいるモニターを凝視しながら指示を送り続け

ていた。

「はやてちゃん！防衛部隊の指揮官が到着です！」

ラインが速度を上げて、はやてのそばまで寄って報告した。

「すまん。遅くなった」

渋い声に渋い容姿をした長身の男が駆け寄ってきた。

はやては直に挨拶をする為に、中継車の屋根から飛び降りる。

「いえ。陸士部隊で研修中の本局特別捜査官、八神はやて一等陸尉です。臨時で応援部隊の指揮を任せられます」

はやては敬礼をしながら、自己紹介と現状を告げた。

「陸上警備隊108部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

男……ゲンヤも敬礼で返す。

「ナカジマ三佐。部隊指揮をお願いしてもよろしいでしょうか？」

はやてがゲンヤに指揮の交代を打診する。

「ああ？お前さんも魔導師か？」

はやては上着のポケットから金色のペンダントを取り出して見せる。それはかつてラインフォースが遺した物だ。

「広域型なんです。空から消火の手伝いを……」

「はやてちゃん！大変ですう！」

「どうしたん？ライン」

慌てふためいているラインがスーツと降りてきた。

「今こっちに向って正体不明の青い装甲車が向っているそうです！あまりに突拍子のない事にはやてとゲンヤは首を傾げてしまった。」

*

レックスランダーは現在臨海第8空港を最終地点に指定して走っていた。

組み込まれているAIは最短かつ安全なルートを検索している。

Aゼロノスは指示に従って、操縦桿とレバーを操作している。

『次の交差点を右です』

操縦桿を右に傾ける。

レックスランダーが右に重心を置いて曲がる。

ギユウンという音を立てて、近くの電灯を一つ破壊した。

火花が飛び散ったがレックスランダーは前へ進む。

助手席に座っているプロキオンが手慣れた操作でボタンを押す。

「機体損傷なし、です」

「この速度でいけば目的地到着まであと五分です」

プロキオンとAIが告げる。

「プロキオン。空港の見取り図を」

「はい！」

Aゼロノスの指示にプロキオンがボタンを押す。

モニターの一つに臨海第8空港の見取り図が映し出される。

「イマジンは一体で、現在移動中です。近辺に魔導師および被災者の反応はありません」

AIの報告を聞きながら、Aゼロノスはレバーを前に倒す。
ギユイイイインという音を立てて、速度を更に上げる。

このレックスランダーは最高速度ならばマシンデンバードやマシンデンバード？、マシンゼロホーンよりは劣るがバイクタイプにはない特殊装備が搭載されているのがメリットだ。

レックスランダーが前方車を一台抜いていく。

「被災者と魔導師の反応あり、イマジンがその地点に足を踏み入れるまで残り一分です」

AIの報告を聞きながら、Aゼロノスはレバーにあるカバーを開く。
一つのボタンがある。

「アフターバーナー点火を用いてのジャンプに必要な距離は満たせています。使用しますか？」

AIの確認に答えるまでもなく、Aゼロノスはボタンを押す。
後部中央のマフラーが火を噴いた。

レックスランダーは速度を上げて、臨海第8空港に立ち入らせないようにする為に設置されたバリケードをふっ飛ばした。

「おい、何か聞こえてこねえか？」

ゲンヤの言葉にはやてとリインも耳に神経を集中させる。何かがちらに向かっているのはわかる。

しかし、それが何なのかはわからない。

「確かに何かに聞こえてはくるけど……」

「リインには何なのかわからないですう」

はやてもリインも聞き覚えのない音なので何なのかはわからない。音が大きくなってくる。つまり近づいているという事だ。

ギューイイイインという音が三人の耳に入った。

「近いですう！」

「な、何や!？」

「チイ！緊急時だつてのに！」

三人が毒づいた直後にドオオオンという音が鳴り響いた。

「……」

はやて、リイン、ゲンヤは口をポカンと開けてそれが頭上を通り過ぎる様を見ているしかなかった。

ズシャンという音が鳴ってそれ……レックスランダーが無事に着陸して、そのまま空港内へと向かっていった。

「お前さんの知り合いか？アレ」

ゲンヤは空港内に向っていくレックスランダーを指差しながらはやてに訊ねた。

「違います！違います！」

「リインも知らないですう！」

はやてもリインも首を横に振って否定した。

その直後に空港の柱に激突する音やガラスをぶち破る音などが三人の耳に入った。

炎が周囲を囲っている中を少女……スバル・ナカジマがとぼとぼと涙を流しながら歩いていった。

「お父さあん。お姉ちゃあん」

助かるのかどうかもわからない中をただ一人、身内を呼びながら歩いていった。

突然の爆発が起こり、スバルは衝撃でふっ飛ばされる。

うつ伏せになって倒れるが、ゆっくりと起き上がる。

「痛いよお……。熱いよお……。こんなやだよお。帰りたいよお

……」

スバルは嗚咽を漏らしながらこの場から離れるが、どのようにして離れたらいいのかわからない。

スバルが倒れている後ろの彫刻物に亀裂が入り始める。

維持できずに砕け、巨大な天使像はスバルに向っていく。

(え?)

スバルが気付いた時には他に何も考えられなかった。

いや考えるより先に本能的に感じ取ったのかもしれない。

自分が『死』を迎えようとしている事に。

それでも本能的に身を構える。

だが、スバルは『死』を迎える事はなかった。

倒れようとしている天使像が無数の桜色の輪で動きを止められていたのだ。

「はあ……。はあ……。よかった。間に合った。助けに来たよ」

スバルとなのはのファーストコンタクトである。

なのはにしてみれば正直ギリギリのところだった。

自分が来るのが遅ければこの少女……。スバルは確実に下敷きになっっていただろう。

(本当によかったあ……)

安堵の息を漏らしたが、そういうわけにはいかない。

すぐさまスバルの前に着地する。

両脚に展開されている桜色の双翼は消える。

スバルに目立った外傷はないが、それでも顔や衣類は汚れていた。

「よく頑張ったね。偉いよ」

なのははスバルと同じ目線になるようにしゃがんで褒める。スバルは言葉にならない言葉を述べようとしている。

「もう大丈夫だからね」

なのははスバルに告げると、安全な場所までの経路を作ろうとする。

『マスター。イマジンの反応があります』

レイジングハート・エクセリオンが警告した。

「ええっ!?!」

なのはは右手をかざして桜色のミッドチルダ式の魔法陣を展開させてスバルを桜色のドームで覆うと、どこから出現するのか警戒する。

(上?下?正面?どこ?)

レイジングハート・エクセリオンを構えながら、周囲を警戒する。

時空管理局に勤務して六年ではあるが、一度も経験した事がないことがある。

それはイマジンと戦闘して勝利する事だ。

そもそも現在の時空管理局は高ランク魔導師には対イマジン戦に際して常に戒厳令が敷かれているのだ。

これはイマジンの能力である『憑依』による二次被害を食い止めるためである。

またも爆発が起こり、爆煙が経つと同時にイマジン……シュライクイマジンが出現した。

「ったく。お宝は取り損ねるは火の海起こすはで散々だぜ」

シュライクイマジンは頭をかきながら能天気 to 告げた。

「憂さ晴らしにテメエ等を狩らせてもらうぜ!」

言うと同時に、シュライクイマジンが向っていく。

なのはもスバルも思わず両目を閉じてしまう。

「え?」

何かの音が聞こえたので、なのはは閉じていた両目を開ける。

ギューイイイインという音を立てながら、何かはこちらに向かってくる。

そして。

「ぶっ」

ドオン、ガシャアンという音を立てながらそれはシュライクイマジンを撥ね飛ばした。

壁を突き破ってシュライクイマジンは外へと飛んだ。

それはT・REXの頭部を髣髴させる青い装甲車だった。

ガーっという音を立てながら、青い装甲車――レックスランダーのキャノピーが開く。

「外まで飛んだか……」

「アイツ、空飛ぶと思いますよ。羽あるし」

レックスランダーからAゼロノスとプロキオンが降車した。

Aゼロノスとなのはの目が合う。

「あの、助けていただいてありがとうございます！」

なのはがAゼロノスにシュライクイマジンの脅威を取り除いてくれた事に対する感謝の言葉を述べる。

「これで二度目だね」

Aゼロノスは短く告げると、シュライクイマジンが作った外まで通じる穴を睨んでいた。

第六話 「G・W。二度目の出会い」（後書き）

次回予告

プロキオン 「仮面ライダー電王LYRICAL AtSです!!」

シュライクイマジンと戦闘する事になったAゼロノス。

なのははスバルを抱えて、外へと飛び立つ。

フェイトもギンガを救出し、はやても消火活動をする。

無事に片付き、ユーノとプロキオンはテントを張って

いた

次元世界へと戻る。

揺らぐ炎を見ながらユーノは思い出す。

第七話 「揺らぐ炎を見つめて……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3059y/>

仮面ライダー電王LYRICAL A's to Strikers

2011年11月30日00時54分発行